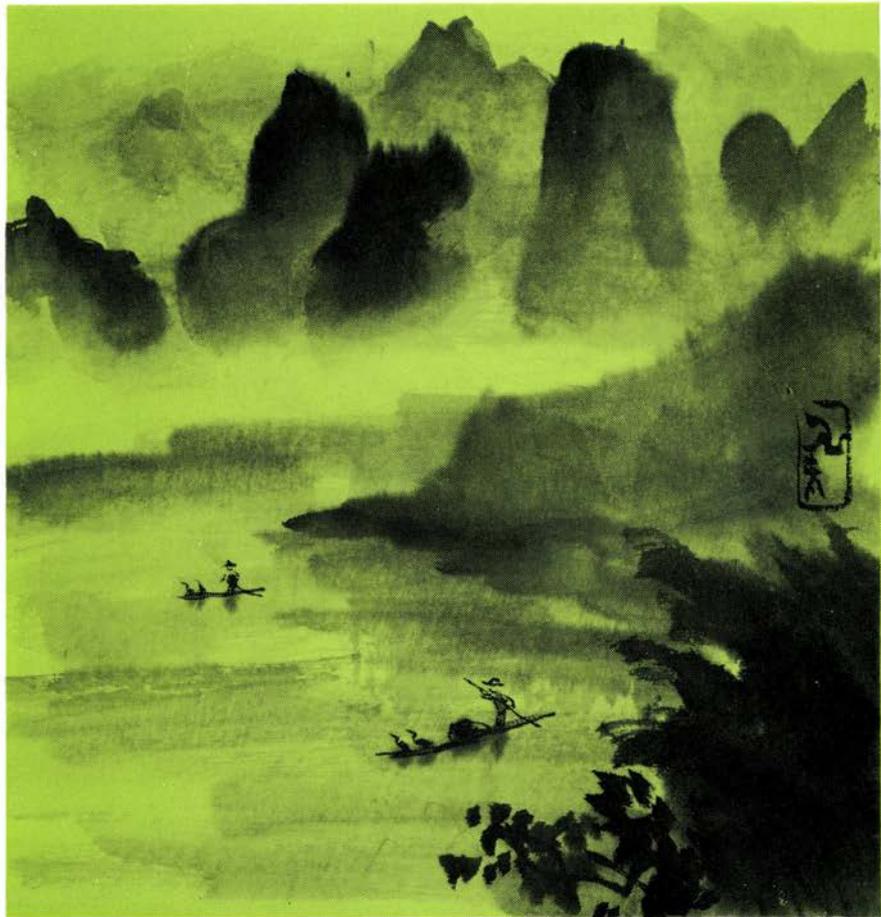


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第一種郵便物認可
昭和十五年四月十五日印刷
昭和十五年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六三六号



日川協加盟

No. 636

五月号

村田瓢太著

25川柳生活『紅』(へにばな)華』発行

日時 55年6月6日(金)午後六時

会場 金 属 会 館

南区鰻谷東之町10番地(地下鉄堺筋線「長堀橋」
下車東スグ)電話271・3935番

柳 話

川 村 好 郎

題と選者

謝 選

村 田 瓢 太

「紅」

笠 原 吸 江

「サラリーマン」

西 田 柳 宏 子

「手品」

菊 沢 小 松 園

席題一題(当日発表・各題三句)
会 費 千 円 (句集・記念品呈)

主 催 川 柳 塔 社

序文・川村 好郎
編集・不二田三夫

頒 価 千 円 (送料共)
発 行 所 川 柳 塔 社

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川纖維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警 察 庁 ・ 警 視 庁
全 国 府 県 警 察 部
大 阪 府 警 察 本 部
講 道 館 ・ 御 指 定

水温む

中島生々庵

水温むという言葉ほど、春うららかなを感じさせる言葉を知らぬ。しかし、それとは別に、私達の生活を暖かく抱くかと思えば、きびしくおびやかすのも水である。ふと今日、どうしたはずみか「水中花咲かせしまひし淋しさよ」の句を思い出し、それが久保田万太郎の作であったことを確めた。川柳では、水を詠んだ佳句が頭に浮かばず、生酔の水だとか、男ならの水鏡の句ぐらいしかである。昔昔私の生地に近い福岡に、黒田如水という文武に秀でた武将が居た。その如水に「水五則」というのがある。「つねに己れの進路を求めてやまざるは水なり」にはじまる、はげしい言葉の五則である。中に「自ら潔うして他の汚濁を洗い、清濁あわせ容るる量あるは水なり」とあるを、今更らに感銘を深くした。この簡明な言葉を反芻してみても、しみじみ憶うことは、近来私が老齢を自覚する機会が多いせいでもあるろうが、身近かな川柳界にも水温む春の足音が聞えて来る気がして楽しい。

座右の句

燃えたまま水の墓となりましょう

(野介)

私の句

哀しいなちゃんと我家に帰る酒

香川 亜成

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

水温 む

中島生々庵 (1)

随想二題

若本多久志 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(一九九丁)

若本多久志 (26)

入江 勇・清 博美・八木敬一・西原 亮・青木迷朗
紀内恒久・鈴木 黄・室山三柳・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (30)

可有と花久 (川柳太平記⑳)

東野 大八 (24)

秀句鑑賞 (同人吟)

黒川 紫香 (28)

愛染帖

谷垣 史好 (37)

愛染曼荼羅 (上)

橘高 薫風選 (40)

一分間の柳論

橘高 薫風 (43)
松本 忠三 (47)

随想二題

若本多久志

昨年、喜寿金婚を記念して「続老いの坂」句文集を上梓し、本社句会ご出席の方々に贈呈した際、郵便はがきを挿入してご批判を乞うた処、約半数のご返事を頂いた。

ご共感句が五十六句もあり、さらに嬉しかつたのは路郎先生をご存知ない方から、先生のお人柄や川柳に対する考え方についての感想であった。

句意不解のご注意を頂いた中に三氏から

傷病のすべては神にと医祖パレー

を挙げられていたことには反省と共に、川柳の難かしさを感じたのであるが、この句は、一五〇年フランスの片田舎に生れ、十九歳の時、理髪師の徒弟としてパリに出、後にある病院に勤務して外科医術を習得、ついに国王の侍医にまで進み「近代外科医学の父」と仰がれたアンブローズ・パレー氏が、神こそ傷を癒し給う、私はただ繻帯をまいただけである」と語った名言を十七文字にとめたもので「医祖ではない」というご指摘も正しく、単に「パレー」では誰のことか解らないのも当然である。

森羅万象のすべてが十七文字の川柳にまと

作品へ影響を与えるもの(随想風に)……………山村 祐 ……(38)

句集「五色苑」……………橋高 薫 風 ……(46)

八木摩太郎氏急逝(弔辞)……………西尾 栞 ……(48)

界の名物男・摩太郎氏……………不二田一三夫 ……(49)

田中狂二氏逝く……………本田恵二郎 ……(52)

初歩教室……………川村好郎選 ……(54)

大萬川柳「肩」……………(庸佑・整理) ……(57)

柳界展望……………辻 圭水選 ……(63)

本社四月句会……………柴田英壬子選 ……(50)

各地柳壇(佳句地10選)……………北山越山選 ……(50)

一路集「珍重」……………弘津柳慶選 ……(51)

「快適」……………(一三夫・葉子) ……(67)

「風習」……………

編集後記……………

座右の句……………

私の句……………(好郎)

素直なる水の流れをまだ見つめ……………

風そよぎ池辺の葦は考える……………水野 弘

まるという思い上がりは、私に深い自戒を与えて頂いたようである。

因に、四百年ほど前の西欧では理髪師が多少の外科治療をやっていたらしく、現在理髪屋さんの店頭看板に青い静脈と赤い動脈が、くるくる廻っているのも、その名残りだという説はまんざらでもないように思われる。

先日、美術評論家、今泉篤男氏のエッセイを読んでいたら、日本医師会々長、武見太郎氏との一問答に興味を覚えた。それは「自分が数年前に肺ガンの手術をしたことを知っていた武見さんに、幼稚な医学上の質問をした処、六十歳以上で大病をして助かるのは、勿論本人の養生にも、医者の治療にもよるところだが、最も大きなファクターは遺伝的体質によるところが多いので、貴方はご先祖さまに対して深く感謝をしなければならぬ」という言葉が返って来た。云々。

私はこちらまで読んで、ふと今年の年頭の拙句
病気で死ぬはず冥加の命かな
を思い出し、人間の生命というものには何か偉大な神秘が潜んでいることを痛感した次第である。

さらに、前出の名言を吐いた武見太郎という人は、巷間、武見天皇とか、喧嘩太郎とも言われている為、強引な人間としてのイメージが強く、嫌いな人間にしていた自分の不明を恥かしく思ったのであった。

川柳塔

中島生々庵選

八尾市 高杉鬼遊
ゆき過ぎと云うほど福祉温くからず
人間に飢えある限り労働歌

年金を戴くまでは生きている
新聞の切りぬきを貯め多忙なり
特級で悪酔いをするろくでなし

青森市 工藤甲吉
万年貧乏気にしては生きられず
チリほどの虫にも生きてゐる歓喜

涅槃会で男やもめと寡婦並び
としよりはどこが古いと負けていず
なまじっか無学の人の物わかり

大阪市 中川滋雀
神前に祈りが冴えてくる余寒
み手洗に嗽ぎ切れない顔もくる

寝つかれぬ夫婦にしみる雨の音

つつましい生活を薰る沈丁花
読むつもりだけで飾った書架になり

尼崎市 黒川紫香
抜け道を行くから碧い空がない
泣き上戸笑い上戸と寝てしま

やれやれと背中を伸ばす春が来る
椅子のない職場で余生働く気
一と船を寺の桜に遅らされ

高槻市 若柳潮花
春の彩葉の花漬けの出るお膳
踊る妓の帯が抱いてる舞い扇

啓蟄へ柳も化粧しはじめ
腰ためてためて男の女舞い
酒 煙草やめたら土にかえるひと

和泉市 西岡洛醉
煙草の輪男勝りの指を抜け

もて余す暇へ囲りの静か過ぎ

鍵っ子の不安は虹を追いかける

倅せか不倅せか女米を研ぐ

朝の月稼ぎの背を追いかける

岡山市 川端柳子

梅林のほころび日記にも匂い

いくばくの悟りの中の老眼鏡

笑顔みて充分だった戻り道

七彩に翔び立つ鶴を孫に折る

やすらぎの源 澄んだ瞳の妻子

桜井市 岩本雀踊子

楢山へ母を誰にも背負わせぬ

母と娘の願いを秘めた流しびな

未来図の中で枯れて行く夫婦

両方の耳ふさいで明日を待っている

自画像の黒子忘れたあわて者

神戸市 仲どんたく

米寿の師喜寿の教え子叱咤する

定退へ過ぎし月日の走馬灯

しよぼくれとうのいて定年赤いタイ

縄暖簾A君死去ここは本音を吐くところ

お水取り去る冬へ添い逝きし友

今治市 月原宵明

少年は受験大人は梅を賞で

日月は速し手形はなお速し

その時の気まぐれ敵にも味方にも

冷凍魚成仏をした貌でなし
妻からのサイン牽制球ばかり

倉敷市 水粉千翁

けんらんと無色の心雪つもる

負けたとも思うわたしを取戻す

あきらめの涙におとこ坂つづく

思い出は三つ違いを語り合い

高軒つづいて父よありがと

倉敷市 小幡里風

人間の真似はいけぬと猿の愚痴

飲みごろの番茶へ妻と窓は雪

マスクして善人小さい嘘を云う

末っ子の気付く吾が家の低気圧

春一番待ってましたと露の臺

岡山県 嘉数千代香

無い袖は振れず悔いなき今日を生き

潤いを消してはならぬ物価高

減反に揺れるたんぼにれんげ咲く

石沈む石のなげきを知る波紋

歳月と流れて古稀の脊が丸い

倉敷市 野田素身郎

春来るといふにわが娘の松葉杖

御見舞へ無理につくっている笑顔

付添いが祖母に変わって甘えさせ

ポケットベル今止り木にいるんだよ

かつては億の金動かしたちびた判

遅ればせながら結婚通知 春
竹原市 小島 蘭 幸

自転車の妻と明るくすれ違ふ
給料日求人欄を妻が見る

春日遅々無策の父を責めはせぬ

ロッキングチェア少し優雅に本を読む

大阪市 河野 君子

春ですな苦のない人のように言う

風の誘いを待つ間羽根を軽くする

空想の果てに置いてた虚栄心

妥協点合わせる眼鏡拭いている

母と娘で話題の絶えぬ灯を点す

八尾市 高橋 夕花

秒針の狂いを人間らしいなと思う

おかめの面に深いかなしみ隠してる

冷やかな笑みを見てから人嫌い

受け身になればみんなやさしい他人ばかり

髪染めぬ若さをすこし持っている

島根県 堀江 正朗

なにもかも忘れる自分の顔までも

妻の顔お茶つぐ音のなかに画き

ちぐはぐな歩巾も許し合うて日々

年取ってここんところから負けと知る

酒すこし少し嬉しいとき刻む

島根県 堀江 芳子

ほどほどの酒に父と子まだ話し

老い想うよりもその日を大事にし
あれからの命に一日ずつすがり
孫見つけそうなどころへかくれんぼ
ひとことの嬉しさ夫の背を見つめ

和歌山市 松原 寿子

濡れた瞳が愛の行方を知っている

文東へ貴方を偲ぶ春の虹

さわやかな敗北と知る最合傘

火車となった言葉に澄む余韻

貴方の胸に憂いをいやす海がある

和歌山市 西山 幸

人ひとり生きる哀しい繩をなう

くたびれた足どり嘸う歩道橋

自画像も観念をした顔になり

無になろうなろうと長い橋渡る

貧乏がたき討ちなど忘れさせ

鳥取市 小林 由多香

そむかれることにも慣れてあわてない

平行線たどる対話のお茶を替え

性格が迷わず白を選ばせる

子らの目へ母平等に切りわけ

明日はあす今日生きて行く紅をぬる

大阪市 金井 文秋

ゆっくりと足踏みをして春が来る

文化とは女に暇が出来てくる

電車賃恵んでやればそれも飲み

種火まだ消さず想いを胸に抱く
若さへの未練が断てぬアデランス

松江市 小林 孤呂二

定年の延びる丁寧な朝の櫛

郷に入りては従うこころの仮面を彫る

嫌なのが居る銭湯で距離を置き

接木までして人は糸図を重んずる

思春期のごとく小枝に蓄つく

宝塚市 傍島 静馬

同病の相次ぐ訃報に気が減入る

金の要る話を金持避けたがり

清貧に甘んじきつてるあかんたれ

マンションに染つておやじ赤を着る

温泉ポケ持つて帰つて按摩する

竹原市 山内 静水

どこまでが本気か妻にテストされ

しんぼしてしんぼして臍首され

手袋をとつて拍手をした温み

そのことにはふれず顔いろ見て戻る

お若いと言われて六十四のおしゃれ

奈良県 村上 春巳

七色に暮れる山あり露天風呂

朝市に飯泥棒と言う自慢

うちの子は悪いと思わぬ叱りよう

停年の延長墓場へ近くなる

天皇が神様だった良き時代

倉敷市 白井 三林坊

限界を知つて阿呆な貌になる

手加減をしたのが貰い子にこたえ

労働者代表ネクタイ付けていず

向き合えば何も云えない人だった

云い負けた指がズボンのちりをはね

倉敷市 田垣 方大

陽の当る場所を歩いてひ弱なり

言訳をせぬ毛筆にある乱れ

スポットを浴びて善人悲しそう

人情を振り切つてゆく上り坂

初夏を踏む裸足は駈け出しそうになる

岡山市 時末 一灯

靴紐を結びいくさの型になる

頭を下げて男服従などしない

減反の稲ひっそりとたわわなり

馬鹿でない証拠に馬鹿の顔でいる

茜雲もう一日だけ待つとする

鳥取市 河村 日満

静物が好きで画になるリンゴ買う

腹やつと読めて別れのいい笑顔

水虫のせせら笑いとなる温くさ

暖冬にわが家は咳の五重奏

通り魔の気持がわかるおぼろ月

美弥市 安平次 弘道

ただし書きにどでん返し秘めてある

格調高い社説本音はのぞかせず

古日記の余白は恋の傷を秘め

やつと資格取ったが銭につながらず

鳶職は心に命綱をかけ

櫻井市 河合茂雄

同権の時代を知らぬひな人形

影武者は所詮味方のない命

終点に大物逃げ込む穴があり

馬鹿にされ馬鹿で通した丸い石

ロボットになってコンベアについていく

米子市 小西雄々

物よりも心うしなう日をおそれ

情力ではエンストしそうな喜寿の坂

岩風呂の湯気に女神のシルエット

ライバルに激励されるほど落目

ローンまだ終らぬうちに雨が漏り

和歌山市 津田与史

計画だ企画だ陽気におだてられ

春の日がクヨクヨするなど光り出す

値上りと目減りに慣れて来た怖さ

サクラ咲くニュースやっぱり気が動く

年の数気にして囲む春ごたつ

岸和田市 高橋操子

二分咲きへ母誘い出す便り書く

春の香はやっぱり春に食べるもの

おにぎりを色々庭の梅見頃

生き延びる感謝孫娘と京の梅
盗まれる太陽ビルの谷で耐え

岸和田市 植山武助

叱らない父をガツチリ受けてくれ

同姓へもしやと尋ねて見たくなり

旅行靴旅馴れて来て小さくなり

春風に誘われ試歩の足が延び

長生の秘訣は知らず母九十

笠岡市 松本忠三

悔った女房の鼻に嗅ぎだされ

わからずやでもいいけじめだけはつけ

女事務と連繫をとる妻の知恵

揉消した積りへどこからか火の手

参加することに意義ある頭数

藤井寺市 児島与呂志

妻と娘の企み聞いている不貞寝

じいちゃんに短い鉛筆やると云う

とも角も両天秤にはかけるまい

割引きのドック入りにもよう行かず

陽だまりに予約してある老夫婦

東大阪市 齋藤三十四

床柱今日は主賓として座る

別件の逮捕で確認つかんでき

馴れ染めをテレビで語り賞もらい

注意書読めと葉売ってくれ

一芸で余生たのしく鑿ふるう

倉敷市 稲田豊作

功績に上下があるか勲章よ

名僧の遺囑に稲妻見る思い

完全癖矯めてずばらも心がけ

仏壇の妻の餅菓子つまみ食い

押し除けて生きる権利を主張され

呉市 横田英詩

蟻の斥候五月の風を嗅ぎに出る

不眠症につきあう雷雨夜もすがら

愚痴三昧読経三昧とは悲し

ジーパンに嘘も隠しもない若さ

公休日仕事の鬼も妻に負け

米子市 佐伯越子

木挽き唄哀調にのせて老木切り

追憶にひたつて寡婦の白き笑み

悪の芽を摘み取る母の愛さびし

水子像触れる女の手が白し

白絹や母の手織の産衣にて

今治市 長野文庫

一しづく油が欲しい戸の軋み

省エネへ漫画奇抜な知恵を貸す

親馬鹿の背のび届かぬ子の不出来

家も無い目に腹の立つゴルフ場

アメリカのこと聞きかじり若づくり

和歌山市 若宮武雄

原爆を人類愛で潰そうよ

真直ぐい道をまっすぐ行く疲れ

そこんとこ真直ぐ通すへそ曲り

所得税につこり納めたい悲願

何となく妻を憚る女文字

豊中市 増田次章

職場去る俺の歴史をきざみ込み

旧い友急所はそつとさけてくれ

友情が俺より俺を心配し

帰れとは云わずホステスみんな去り

トゲのある噂も交り同窓会

岡山市 井上柳五郎

ボツリ兩バスの遅れも腹を立て

店の閑喫い過ぎたばこまではやき

捨てることためらい整理またできず

病名は知らせてならぬ声おとす

女だけわかる心理と言うてすね

大阪市 河井庸佑

引き際を心得えていて惜しまれる

青写真通りにいかぬと肚くくる

ジョギングのコースを変えた訳があり

終電にいつもの顔が乗ってこず

昇進へ裏も表もかみ分ける

松江市 梅本登美也

ギャラの為敢えて演じるよこれ役

かたつむり急ぎの用を思い出し

こども部屋近頃ノックを要求し

ダイヤより花一輪の重み知る
台どころ会計主任が風邪で寝る

東大阪市

萩尾 真佐志

古文書のように出て来たラブレター
お一人の身体でないと痛いところ

衣食住皆少しずつ欠けたまま
負けそうな理屈へ声が荒くなり

方便の嘘善人の隠れみの

鳥取市

岸 本 無 人

寒がりを一枚脱がした春の風

あたたかい言葉を別れの背なに聞く

常備菜無駄をよろこび買い替える

カンニングしたとは書かず日記閉ず

子育ての終った古巣へ孫を呼び

大阪市

神夏磯 道 子

すみれの芽小さな鉢にも春が来た
ときめきは次へ会う日の色を撰る

もろた券特別席でひとりぼち

握手せぬ片手は何か言いたそう

消印のない悲しみの置手紙

島根県

錦 織 文 子

喜こびをこわさぬように夫を待ち

手のかかる孫守りをする倅もあり

手のひらで春唄いだす露のとう

庭石の肌にも春が来て坐り

店頭へ匂い忘れた 花 野菜

老近し夫婦の愛も深まりぬ

物価暴騰女房だけは良く太り

事ここに到って信念ひっこめず

ゆっくりと食べるわけではない入南

桜前線また酒飲めとやって来る

島根県

大 野 醉 夢

中年の坂で夫婦の鈴が鳴る

断絶へ血のつながった輪を投げる

故郷なまり消した女の赤い爪

結び目の一つに愛の芽が育つ

左手も右手も稼ぐ観光地

富田林市

板 尾 岳 人

罪のない男は山で欲捨てる

少女の瞳山の高さを憎むなり

ネクタイに山の絵を画く息子達

ピノキオの母で噂を山に捨てる

少年の母も山の絵画にいてる

大阪市

大 坂 形 水

繰り越しを使ってしまふ解散会

一応は遺書の書き方知っておく

先生が来るから続いている話

耳だけは音痴ながらも少し肥え

ハワイツアー宿替えほどの荷物持ち

男性の扇子の風は汗臭し

大阪市

不 二 田 一 三 夫

小遣いが切れると左翼めく彼さ

河井庸佑の長男結婚ご難(55・3・15)

大安は百万掏ったスリへ向き

のんき節の吾妻ひな子さん急死(55・3・8)

「それではみなさんさよおーなら」ハハのんきだね

「おんな放談」数本執筆

舌たらずの台本 三味に助けられ

大阪市 小出智子

木の芽だち夫の夢を聞いている

亡母と来た桜へひとり佇ちつくし

期待から遠ざかりゆく旅艶

正直者のさみしさを抱いて寝る

桜には余程に遠き胸の内

東大阪市 市場 没食子

日日新たな年寄辞書や子に頼り

塾へ行つて遊び盛りの子が居らず

電話で用ませ書くことおっくがり

男一匹再就職の墨を擦る

神戸市 中村 ゆきを

寝たきりの四月へ小窓が語りかけ

自信ない権力の座で部下いじめ

気の廻しすぎて年中胃が疲れ

慰めるつもりが喧嘩の酒になり

西宮市 島居 白宗

慧眼はまだ衰えぬ老社長

祖父ちゃんはいつ死ぬのかと死を知らず

さりながら余命幾莫止めぬ酒
素通りはできず十円のお賽銭

富田林市 岩田美代

そう言えば雨も風もやわらかい

目をそらし話もそらし春を吸う

結論を出さずに落ちた玉椿

桃咲いて小さな約束忘れ得ず

堺市 高橋 千万子

卒業式きれいな恋の終つた日

長電話女の底が見えてくる

久しぶり女は身なりから探る

小遣いためた孫へ端数足してやる

京都市 松川 杜的

落葉動かずもう鯉の居ない池

白梅をバックに撮り合うて老夫妻

たかが百分の二秒差落した銅メダル

白梅をアッブに二月の青い空

倉敷市 藤井 春日

澄んだ瞳に白い歯こぼれる笑い顔

あがいても運命の歯車とまらない

悪い癖だけが似て来る子に困り

母さんの鼻唄家中明るくす

奈良市 宮口 笛生

嵩だかい男になって職はなれ

送別会ひとり無口になってくる

ネクタイの要らぬ仕事へ弁当持ち

飯場雨北と南の国なまり

出雲市 原 独 仙

余剰金処理の期末に宴とかや
乾杯のあと脱線組に誘われる
年金が孫甘やかし叱られる

(テレビ「楽園の日々」を見て)

長生きをして良いのやら悪いやら

泉佐野市 阿 萬 萬 的

促成野菜人間エゴの実を結ぶ

チビ筆に似た妻といて日々平和

たまさかの夜業一家に労わられ

山茶花散り敷いて山手の団地です

堺 市 藤 井 一 二 三

(姪太田みかちゃん高校合格)

お礼詣り笑顔が拝む手へこぼれ

梅と春競うて高し呱呱の声 (吉田昌子さん長女安産)

(待春抄)

はずむ目で一輪の梅讀えあい

歡喜仏に似て一輪の梅が咲く

兵庫県 遠 山 可 住

同郷の絆一つがありがたし

兄弟が九人重宝な役を持ち

老夫婦おとぎばなしが背に隠れ

知恵を出し合うて自然に負けている

島根県 藤 井 明 朗

小さい嘘が廻り廻って渦となる

財布別々に持ち老妻と旅をゆく

桜 酒 値上げ待ったなしでくる

もうこれで会わぬと決めた差し向い

大田市 藤 田 軒 太 楼

無い袖は振れぬと無いのを鼻にかけ

税務署へ行くリハーサルだつてあり

こぼれ種芽生えて天地の愛を知る

花束は燃える女の心知る

富田林市 和 田 維 久 子

母になる自信のまぶしい顔に会う

男子誕生地球の重さと比べられ

抱かれたくない児を母は抱きたがり

さよならの一言に明日会える倅こもり

和歌山市 垂 井 千 寿 子

病名の言えぬ窓辺の千羽鶴

言葉より涙の後に従いて行く

善人は善人等と思つてず

一言で解る言葉を言いそびれ 八尾市 香 川 醉 々

大げさに鬼がほおける鬼やらい

歳月の重さに耐えている遺跡

賽の目が狂いましたという話

横丁の四季のら猫も健在で

松江市 中 川 晃 男

城下町の柳青んで客を呼ぶ

希望の春へ親は段々置いてかれ

妻の留守娘がくれたおやつ焼芋
孫の声聞きたさ宿直から電話

松原市 谷垣史好

苛立ちは蟻延々と続くなり
追憶を断てと紋白蝶が舞う

ちぐはぐな色も春なら許される
うどん屋の出前に惜しい大男

竹原市 森井菁居

春に誘われて宿題すんでいず
結論が少しは欲しいスローガン
針の山越えねば鬼の思うつば
春が待つ雨の坂なら苦にならぬ

東広島市 高橋鬼焼

ポケットの嘘がおちない洗濯機
春の灯へ運命線がみじかすぎ
雑草の命を踏んで立話
ネクタイが斜めにゆれて風も春

兵庫県 北山越山

竹割ったようなお方で役がない
深呼吸やっぱりうまい里の風
裏切の傘は最後にうまくさし
舞い過ぎて蝶は蜘蛛の巣知らなんだ

和歌山市 浦野和子

春うらら新芽にっこり土を割る
躓いてよかった奈落が見えて居た
善人の矛先正面切ってくる

傘さして絵になる女城下町

岸和田市 古野ひで

背景はどうあろうとも好き同志
春うらら朝寝へ雀の声せわし
友の計を掲示板で知るショック
やすらぎを求めて花とひそという

八尾市 宮西弥生

ひな人形並ぶと殺意が消えていた
肩書きへ嫁いで無言といくさする
裏の裏知って下町はなれない
上向きの運もっている離婚歴

和歌山市 内芝としよ

女は今日男は明日を考える
春うらら仁王もにっこりしたかろう
地味を着て一入色香の未亡人
なり振りをかまわぬ人にも別の顔

兵庫県 大江秋月

集団旅行のように鳥は朝を飛ぶ
通勤車座席指定のよう座り
金の無い男とマダム目で合図
孫二人増えちと狭い台所

宇部市 平田実男

日記帳の字も翔んでいる嬉しい日
アテランスつけると背筋も腰も伸び
医は仁術植物人間まで造り
爪の垢ダイヤが模造に見えてくる

枚方市 宮川珠笑

すき焼にしますと寄り道制止され
喫がらを掃く足元にホイと捨て
割勘のみんなそんなに飲んでいず
横車押しとき当日参加せず

守口市 野呂右近

若い日は頼られ老いて頼る妻
幸せな日日正確に脈を打ち
胸張って歩けと春の陽が誘う
顔も見ず見せず女の靴磨き

二男卒業 大阪市 江城修史

晴れ姿吾が子と春の陽をかける
夢一つ叶えて吾が子の晴れ姿
春を呼ぶチラシが冬を安く売る
懐手嘔吐くことに慣れた顔

東大阪市 竹中綾女

亡夫の夢見てさめた朝尚淋し
三日目に起き出し針を持って見る
買物は嫁に電話し頼むはめ
病氣増え亡夫の所へ近くなり

島根県 榎みどり

嘘のない人形の瞳から出る涙
石一つなげて一人の散歩道
みの虫を動かす春の音がする
市場菴春の物価に風が吹く

貝塚市 行天千代

水温るむ春待ちかねる老の身に
桃の花 菜種 お墓も春になり
家中の風邪吹きとばせ春の風
詣るより付録の温泉魅力有り

西宮市 藤村ノ女

新妻の余熱ポケットに持ち歩く
山彦へ精一杯の声を上げ
激励をされても翔べない鳩もいる
五月雨の女の未練渦となる

鳥取市 両川洋々

レットルを貼られて男肚を決め
五線譜へああ失恋の符が乱れ
忍び逢う恋とドリンク知っている
矢も弾も尽きて女があせり出し

守口市 羽原静歩

一枚の瓦に祈りこめてある
雲雀舞う空を眺めて夫婦なり
定期券又買いかえて買いかえて
木曾の味とろりととけて五平餅

平田市 久家代仕男

欲異抄に学びこころのゆとりもつ
たかぶりを押え寝て聞く風の音
菜の花が野辺に素朴な山の宿
雨だれの音も更けゆくものうち

寝屋川市 江口度

風見鶏春一番を待っている

親の笛いつも正面向けたがる
入れ歯はめても歯きしりが直らない
年金へゆっくり回り回る夫婦独楽

和歌山市 野村 太茂津

咳きを連らねて書いて出る吐息
避けてゆくことも出来ない位置につき
素振りにも見せず寂しい人の背な
白日の汚点を人間丸出して

羽曳野市 塩満 敏

煙草の火つけて記憶を確かめる
晴れ着からナフタリンの香が転げ落ち
裏目で女ブイと立ち上る
一滴のことでコップの水あふれ

倉吉市 奥谷 弘朗

値上げしておいて省エネ強いられる
念願はいい人だったと言われたし
老夫婦いとも小さな願いごと
快適な言葉が返える嬉しい日

柳井市 弘津 柳慶

気の強い嫁で一家丸くあり
第二の人生終り近くに物価高
余生もう句会巡礼する心算
マイカーで来て祝膳の味気なさ

米子市 林 瑞枝

赤坂の灯は黒幕の罪も抱き
衣食足り過ぎうるおいの欠く世代

春一番冬眠を覚めたプロポーズ
曲り角初心に還った汗を拭く

大阪市 欄 蘭

省エネへ煉炭したり顔をする
栄光の曲り角から崩れ落ち
妻の留守目玉焼なら出来そう
せっかちの投げたボールは横にそれ

岡山県 直原 七面山

ライバルの自信が僕を苛立たせ
高ぶりを自覚まだまだ老いていず
用意した祝辞の主が事故で逝き
世の中を見て来ますわと娘が家出

島根県 西村 早苗

反対のピラも受け取る義理一つ
また一つ歌をおぼえた孫と手を
すし巻いて妻と子が出る早春譜
まねをするともなくいつか父に似る

川西市 戸田 古方

春なれば造花のいろも春の色
赤を着て堂々と立っている男
グレイ紙に描けば白梅さえかえり
葬式いらん墓いらんという耳順

奈良市 森田 カズエ

らせん階段のぼれば月へ行けそう
うたた寝は悪口聞かぬ顔で起き
夫婦円満のお守り妻も買ってくる

底力なんて余力がどこにある

東大阪市 桑原喜風

税金は惜しく享樂良く弾み

今日は友明日は我身と吹く嵐

ギャンブルの果ては三面記事で泣き

早起きの祈りは今日進む路

鳥取県 鈴木村諷子

蟻の通せわし地獄へ続く道

飽きもせず積木遊戯の七十年

目の高さほどの視界に生きるのみ

自販機のようにうどんを置いて行き

鳥根県 大森孝華

煮つまらぬ話煮つめて年の功

贈られて対話のつきぬ福寿草

ほのぼのと過去のアルバム共白髪

冬枯れて粉雪風情を添えて舞い

大阪市 天正千梢

いたわりへ涙老いかとも思い

ライバルが抜手でさっさと越して行き

絹を吐く蚕無心に桑を食べ

晴着きてよそ行きの言葉さがしてる

鳥根県 小砂白汀

過ぎたるは及ばぬおせじ酌きこぼし

急な冷え暑中見舞を出しそびれ

向日葵の夢はひたすら天めざす

闇の夜があるとは見せぬ満月の

和歌山市 福本英子

温もりがほしくて人に逢いに行く

春うらら写経の筆の遅れがち

鯉群れて椿一輪ただよわせ

春日を再起へ励む車椅子

鳥取県 森田布堂

人間の心笑って花は散り

頂上で見あげる空も限りなし

四苦八苦背負う因果な孤々の声

骨壺の中で手足が伸ばせない

仙台市 川村映輝

捨て球がゲームセットのホームラン

計数に弱いがちやつかり儲けてる

汐の香が染みて海から上れない

誕生順に逝くなら諦めつくものを

鳥取県 金川満春

肩書の長い弔電くたびれる

潮時とチャンス人生振分ける

こだわらぬ陽気な嫁で丸くいろ

反論が出るは覚悟の主張する

呉市 林野甦光

コーヒの一口縊が戻りかけ

語尾少しにごして疑惑凍らせる

膝崩すつもりお経に遠く座し

心もち余裕が出来た胃の疲れ

寝屋川市 宮尾 あいき

黄水仙のささやき聞いているコケシびな

ひな段へ名残りを惜しむ桃の花

いやな事流しておくれ今日の雨

孫の入学祝に年金のタイミン

岸和田市 狭間 希久志

父として男としても耐える朝

首切りに泣いてもおれず探す糧

親切に近日値上げと小売商

口下手の女は涙で訴える

松江市 柳 楽 鶴 丸

三本勝負は僕の性にはあいません

男にて候日本海が好き

うっかりすとトラブルおこす妻の肌

春が好きみどりに煙る春が好き

島根県 榎 原 秀 子

新入学夢托してる親と子と

慈母に似る陽の恵あり草に座す

おろかさの故の自爆に堪えんとす

話合えばみなそれぞれ悩もち

鳥取県 川 崎 秋 女

虚勢張る女安らく場を持たぬ

午前五時生きねばならぬ顔洗う

男下駄置いてひとりの城守る

父の死の父の足跡しかと抱く

大阪市 神 田 秀 峰

無駄というゆとりがあつてこそその巾

人生に財を残さずゴミを溜め

国民に省エネ高官大型車

鳥取県 林 露 杖

ものの芽の踏まれたままの型に伸び

転居先報せぬ友の距離思う

不遇の日川の淀みも疎ましく

卒業証書留年歴には触れず

鳥取県 福 田 保 子

善人の嘘は神経すりへらし

赴任して心のトゲを抜く別居

下積みを逃げたい足袋がすり切れる

ぬるま湯の中で一揆の血を押え

河内長野市 井 上 喜 醉

模範とは制服着てから馬鹿になり

忍び逢う京都の湯豆腐暖かい

反骨の渦で若さがカット燃え

ずうずうしい奴と云われた世帯馴れ

東大阪市 本 多 清 人

関取りが歩いて大阪春が来る

月一度盛り場歩く社会学

高架から省エネどころかネオン街

寝過ぎた朝のリズムが忙わしすぎ

藤井寺市 中 原 比 呂 志

地下鉄で迷いたずねて一心寺

引く事はあつても曲げぬ自己主張

糸切れて髭がおかしい奴風
信頼の手が両肩をぐつと押し

羽曳野市

榎本吐来

偏屈が我が子に諭す処世訓
真実を知らぬ噂へ目をつぶり
冷戦中斜めの傘がすれ違い
あばら家がオアシスとなる旅帰り

岸和田市

福浦勝晴

盛り場をまつすぐ六十五の自覚
パチンコ屋で鹿爪らしくベレー帽
駆け引きも大阪弁でスムーズに
病み上がりの素足に絡む初夏の風

姫路市

植村客遊子

紀元節とは云わないが国旗立て

その人を意識している花袂

よう出来てはるとじんわり皮肉られ

義母の訃に皮肉涙が出て来ない

大阪市

本多柳志

セールのノルマに耐えている歩巾
拝むのを忘れてました萩の寺
ばんぼりの灯りも暗いひなまつり
逆転の期待に遠く居る老後

今治市

越智一水

行き過ぎてから挨拶を交わし合い
考えのちがいが口ポットとも言われ
滅反へいどむ男の不精髭

水たまり雲をうつして春の唄

京都市

山本規不風

飛んで来た拳へ愛の眼を返す
愚痴溜めたマスクをはずす春の風邪
相談を受けて慌わてるお人好し
姑の笑顔が嫁の電話から

大阪市

柳原静香

きこえぬが見るものすべてに彩があり
着ぶくれて愛と言う字にほど遠く
タンポポも芹も埋ずめて家が建ち
装えばよそおう程に老いが見え

豊中市

安藤寿美子

顔つきがだんだん変って来る電話
大き過ぎる小さ過ぎると旅靴
旅支度向うは夏やそうできて
定年退職まだピンと来ぬ妻であり

松原市

北野久子

人嫌いどころか愛に飢えている
食べ残り嫁は気さくに箸運ぶ
出す人もあろうが銀行大繁盛
ゆったりと着こなしええしらしく見せ

新宮市

大矢十郎

無理に売り付けた直後にいいお客
老人ホームにも男ボス女ボス
痛いところ突き合い銀婚無事に済み
遊ばせて権利を誇る地が憎い

奈良県 上田 翠光

慾目でも五分の一と云う余命

この孫に背負わす業を日々重ね

ふり向いたとこに仏の慈悲がある

手を合わす手には邪心を抱かせず

一輪挿し殺風景な窓を消し

三人目も女であとの子が怖い

そのままの子の作文に待ったかけ

子の事になれば一歩も引かぬ妻

三重県 坪田 冬花

下関市

国 弘 半休門

停年のない仕事場の鬼でよし

如月の北風一枚着込んで出

天網は疎にして小者がひっかかる

裏口で教育ママが捕まった

唐津市 新岡 回天子

土地売って暮し変った長男坊

ありしこと整理しておくも年もせい

盆栽の百年を経て生きる土

春風は俺の為めだと虫唄う

大阪市 本間 満津子

捨て育ちの万年青の青を褒められる

友情へ報いるなにもないいたみ

見えぬ目に心眼賜う天の慈悲

大切にされてお茶の芽摘み取られ

寝屋川市 柴田 英壬子

したたかな春雨蕾よ油断すな

転進のチャンス見失ったまま女

指が太すぎてポケット計算器

和歌山市 桑原 道夫

売店でおもむろに買う死亡記事

鳥籠に餌をやる煙草吸いながら

地下道のひかり集めて急ぐかな

横丁にこの世を拗ねた知恵が住む

横歩きに歩いて蟹の正統派

発つまでを二人の時間にするコーヒー

大阪府 西森 花村

取るものはちやっかり取って小京都

交通事故それからばれたスキヤンダル

中国旅行日本の漢字おまへんな

どだい無理ですと三面鏡が云う

気の毒な男で自分を売り歩く

愛と云う段階ならば許される

大阪市 神谷 凡九郎

皆こうだったと古参の強い鞭

同僚にも職場小姑になる女

ふがいなさ詫びれば亡母もにが笑い

充電ができないままに夜が明ける

鳥取市 佐々木 静泉

大阪府 藤田 頂留子

大阪府 藤田 頂留子

早寝早起き妻とは逆で叱られる

姫路市 大原葉香

舞扇ひらりと舞えば目も光る

アンテナを下ろし三猿主義で生き

やり直しきかぬ人生だから賭け

大阪市 横地雅風

やれやれの石段若さにまた抜かれ

立喰いは生存マラソン負けぬ智恵

早よ巻いたばかりにキヤベツ首が飛び

大阪市 西川善紫

無駄使いも多いと財布に叱られる

買えば減るし買わなくともまた目減り

欲に目が眩み一足す一が三

兵庫県 河原みのる

五ツ子も二度目はまたかと扱われ

出かかった迷信咽喉で押えとき

孫の死へ生き過ぎのよな目が刺さり

竹原市 時広一路

笛の音が空駆け抜ける草の土手

川底に芽生えた草が生きている

地図にない道は二人でなら探す

京都市 都倉求芽

湯豆腐が煮えて大きく足崩す

部屋がいつもの春のとこまで来

春嵐歯痛の夜を寝かせない

大阪市 北勝美

南九州の旅

龍舌蘭飛び交うインコ春のどか

鶴戸の宮荒海にらむ国鎮め

緋寒桜色鮮やかに磯の庭

加賀市 細呂木魯木

見栄をはり虚栄に負けた末路知り

げんこつを知らず過保護で卒業

進学をコンベアーのように仕わけられ

松江市 恒松町紅

味噌汁のさめない距離を妻通い

海外旅行してから浮気疑ぐられ

座敷から眺める空を賞めてくれ

玉野市 小谷仙山

出る杭の何か言いたい面構え

似せ物が良く似合ってる暮し向き

春一番奈良の水取り待ち切れず

米子市 石垣花子

つかつかと土足で人の心踏み

忍従に馴らされ一人言の癖

譲られた席へ坐らぬ自尊心

羽咋市 三宅ろ亭

江を浚らえ村は農事の春を呼ぶ

医療公費何だか肩身狭くなり

二次会の功かライバルと手を握り

枚方市 水野弘

快適な老後を信ずる朝の靴

肩書がとれて気楽とわびしさと

肩書など無関係です君と僕

岡山県 出原敬一

メンバーが殖えても減つても鍋料理

米子市 増田竹馬

行商女雨の降る日は母となる

丸窓へ月夜の竹が絵を創る

旅帰り先ず盆栽へ話しかけ

兎をあやす声は春めく窓を開け

岩井本蔭樺

倉敷市 斎藤通風

乱れてぬ着衣がせめてもの救い

ひと区切りつけた農夫へ月おぼろ

点滴を自慢で語る暇男

鬱憤をはらすに小石重すぎる

新緑の香も包み込む柏餅

鳥取市 加藤貞山

青森県 五十嵐操史

思い出は懐しく褪せ古雛飾る

箸を割り猪の飛び込む牡丹鍋

片言の曾孫中にし雛祝う

七尾市 松高秀峰

生命ある限り誠を通そうか

くつろぎのある夫婦なり口げんか

勇氣ある片道切符買いたまえ

大阪市 那須鎮彦

どの顔も義理で来ている御会葬

物価高負けまいとする朝を起き

実力の不足を金がカバーする

鳥取県 清水一保

いつか又砕けた夢のかけら継ぐ

カラフルな葉に命を預けて居

はやる気へ腰の痛みが歯止めする

岸和田市 島崎富志子

西宮市 若林草右

内職で追っかけている物価高

食べ散らす子へ肝冷やす物価高

出雲市 高橋可保留

血圧へ妻まざく不味く料理する

定年が灰汁を残した廻り椅子

豪勢なマンション寂しいご出棺

産着縫う視線出合うた差向い

大阪市 津守柳伸

決断へやっぱり暦借り出され
なるようになる世渡りへ一本気
借金を背おうて働き蜂楽し

東大阪市

崎山美子

色あせた写真にしのぶ若い頃

三猿になれず浮世に流される

仲人の智恵酒ぐせにふれてこず

大阪市

室谷徹舟

神様も親も忙し入学期

自活力つけて女の不幸せ

金の要るアイデア人が先にやる

岸和田市

清野こう

枝ぶりの良さたしかめて花ばさみ

満ち足りた世に耐える事忘れがち

桃の花孫の節句の花ばさみ

兵庫県

辻文平

一人寝てまた聴いている雛の私語

さよならと言えば明日から敵になる

母にして女を捨てぬぬか袋

岡山市

岩道博友

背延びして見えぬ構図を探ぐる旅

雲海へ浮かれてみたい早春賦

口下手が急所を突くからすぐにばれ

岡山市

花田たけ志

お茶かけてめしのまずさに抗議する
幸運を求めあぐんでけつまずき

良心に片手はとかく叛くもの

松江市

竹内寿美

梅開く故郷思うドヤ暮らし

底辺を稼ぎ見上げる空の蒼

吹雪く橋渡つて今日も逢いに行く

海南市

牛尾緑楼

神棚のグルマ片目のままにらみ

硬骨で鳴らし屋台の一人酒

バストだけ自信が持てる受験生

熊野市

西久保苔石

自分だけ損はできぬと値を競い

庖丁に積もる修業の味かくし

途中までぬれる覚悟に母の傘

兵庫県

藤後実男

伝言板みな読みつくし人を待ち

ライバルへ振り向く男のゆとりもち

兵庫県

浜田久米雄

春風へまかせ顔を乗せて出る

如何ともし難く桜散りはじめ

したくない返事は薄笑いですませ

古々米になつて瑞穂の味が落ち

良心がまばたきをして嘘をつき

兵庫県

本田恵二郎

釣竿で浮世の憂さを払いのけ

久し振り話の種があり過ぎて

子の絵筆親を三原色で画き
素顔しか見たことがない亡母だった
焚火パチパチ親子の対話ははずませる

尼 緑之助

海近くなって川水騒ぎ出す

春動く気配に朝の庭を掃く

お隣りの増築あれこれ気にかかり

早よ覚めて病妻無言茶に對す

まだ生きているよと交わす久しぶり

若 本 多久志

春一番山で亡くした子を思う

鳴門からわかめ 朝餉に友の味

老い二人今日もたべたい物語り

老いゆえの親切 わびしく受けておく

電話してまだ念入りの催促状

菊 沢 小松園

漆刷毛急かす慌てず文化財

散り際のきれいさ知らぬ水中花

粗品進呈なるほど粗品ほやかれず

生きて知る廂に風の戦ぐと

枕裏返すだけですべてが浄まるか

正 本 水 客

雪おんな雪の白さに負けている
灯を消してからライバルと妥協する
袋小路にはいった自分を知っている
夫婦して気楽な話題選っている
場違いのように蜘蛛の巣ゆれている

西 尾 栞

ふる里にむすぶ夢あり沈丁花
友だちも夜行性なりそれでよし
趣味の二人もう他人でない言葉
長兄として折目ただしき受け答え
お前も俺も三月生れ桃の花

伊 藤 茶 仏

焦点がかすむ絞りの効かぬ日日
気紛れのパイプ紫煙を弄び
点滴に腕の青さがすける妻
自惚れと卑下とミックス桜散る
インフレの歯止め値上げを待つ政治

川 村 好 郎

さりげないしぐさの中に夫婦愛
もやもやを断ち切る白い花を買う
むさんこに逢いたい日なり春うらら
早大は落ちましたという自慢
まさかとは思う噂へ触れずおく

川柳太平記 (24)

可有と花久

東野大八

宝曆・明和以降約二百年にもおよぶ川柳なるものの伝承は、ひとり柄井川柳のお手柄ではない。初代川柳をとり巻くブレーンの数多の優秀な人材の功績であるが、その最も筆頭の功労者は呉陵軒可有(木綿)である。

川柳古典の随一は柳多留だが、この江戸古典文学の貴重な資料でもあり、川柳史上筆頭の可有的な手によって生れた、柳多留初篇に――さみだれのつれづれに、あその隅よりここの棚より、ふるとしの前句付のすりものを捜し出し、書肆の何某来りて、此儘に反古になさんとも本意なしといえるにまかせ、一句にて句意のわかりやすきを挙て一帖となし――

とは彼の序文である。この発刊趣旨からすれば、可有のインスタント的アイデアで、まるでヒマ潰し半分の形のようなだが、これがなんと百六十七篇も続き、数年の休刊こそあれ七十余年間も刊行されようとは、当の可有や花久はもとより柄井川柳とて思いもよらぬことであつたに相違ない。

柳多留は「武玉川」の人氣がヒントになっていることは事実のようだが、万句合が年毎に過熟するブームで取月の二枚摺りから果ては五枚摺まで登場するにおいては、花久も黙つて見過すわけにはいかなかつたらしい。

「書肆何某来りて、この儘反古になさんとも本意なし」と言い出したのは花久であらう。

「誹風柳多留」初篇は序一丁、本文四十二丁で毎丁十八句(2篇のみは十六句)計七五六句で、体裁は往時の暦風であるところから俗に暦刷といつた。(往時俳書のスタイルは、ほとんどこの暦刷風のものだった)

花久のことは後述するが、編者可有の事柄についてはさっぱり資料がない。柳多留二十篇の序に雨譚がこう記す。

「昔々三十年も昔より開き毎に上名護屋(註)頭巾のこと、上名護屋は上もの(木綿)をはづさず(中略)連中(こと)をいえば、こりようけん(御了見)こりようけん(と)わびる」といった意味のことがあるところから、田満

洒脱の抜け目のない親爺だったらしい。

彼は上野山下の桜木連の連中で、花久とは親友の間柄だったらしい。柳号木綿は、その頭巾から出たらしいが、一説には稼業が呉服太物商であつたとの推定もある。

参考までというとな、柳多留は二十四篇までが柄井川柳の撰句でうち八篇までは万句合せで、初篇七五六句。二篇六二四句。三篇七四七句。四篇七二〇句。五篇七三七句。六篇七二七句。七篇七三八句。八篇七二八句となつている。これらは完全に万句合からの抜すいで、明和七年十月二十五日の礼印から明和八年十月五日の仁印までの分である。即ち万句

合の摺ものを一、三年後に柳多留に抜き出し印刷したことになる。

可有は二十三篇序文が最後で、天明八年五月二十九日が忌日で、二十三年間柳多留に打ち込んでいる。彼の死後二年で柄井川柳は死去している。随って可有・花久・川柳が完全な柳多留のトリオであったわけだ。

—雲晴れて誠の空や蟬の声(可有辞世)

柳多留二十二篇は、その巻末に可有追善盆句会が桜木連主催の追悼特集をつけている。

つきは花久だが、通称花屋久治・久治郎ともいふ下谷竹町に星運堂という出版業を営む。上野五条天神裏に住居するので菅裏という。十四世根岸川柳著の花屋の看板にこうある。

二上り潮来節―恋する身は花屋のやなぎ、
かぜに吹かれて待ちあかす(古川柳辞典)

彼は二陽素外の門を出て、柄井川柳に傾倒上野桜木連に加ったのが齡二十三歳ころ。

「花屋の柳樽」と一枚看板で柳多留の出版販売に当る傍ら、未摘花・俳諧離、俳諧種卸し若眼鏡、野々錦など多くの出版もやった。

可有没後、柳多留二十六篇以降に序文や撰句も行っており、文政二年八十五歳の長寿で死去している。文政年間に「菅裡」それから「菅籬」と改号して四冊の柳多留序文を書いたが、百二十五篇に奎文閣石井佐太郎に柳多

留の板権を譲渡している。この原因は川柳三世孝達が、非才で私行芳しからず、初代の信望を失逐、しきりに地方万句合や献納句の収録に手を出したことにより、花久はついに柳多留を見限ったとみてよい。柳多留百六十七篇は、大正震災後、飛騨高山で発見されているのもその現れかもしれない。

花久といえは、未摘花のほか、俳諧離の出版が目される。明和五年(一七六八)の柳多留三篇刊行直後、露竹舎雪成の編で、内容は江戸各派宗匠八十名の高点句集で、いわば往時の雑俳宗匠名鑑の観を呈して、その各宗匠の勝句は、完全に初代川柳の衣鉢に通ずる川柳句がほとんどで三十篇まで出した。

この評判の宜しきを得て、離(けい)のつく刊行物が狂歌、俳諧歌、傾城、俳優等の雑板にはすべて尻にこのけいをつけて横行した。

とにかくフタ開けの「俳諧離」は、花久板のヒット版で川柳識者の間でも貴重な文献として高く評価されている。思えばこの刊行は、柄井川柳の川柳点の程のよさと、柳多留のPRの役目を果たしたもので、花久の意図はどうかやら柄井川柳の点者格付の下心が潜んでのことと思われる。この本の扉は、柳多留とそっくりで「無名庵」をつけ殊更に編者は「是柳門興起頃也」と記す等その高点句の採録の撰

者は、無名庵川柳が担当している点を暗に強調しているのがそれである。

またこの本に収められた宗匠八十名は、すべて江戸座所屬で、江戸座の前句付が川柳派の前句付とはほぼ同様の句型を示していた。主なる宗匠の派閥はつぎの八グループである。

宗因座Ⅱ沾涼はじめ八名。乾什座Ⅱ来雨はじめ三名。其角庭Ⅱ湖十、紀逸ら十一名。一漁派Ⅱ一漁、祇北ら六名。沾山派Ⅱ沾山はじめ十一名。平砂派Ⅱ平砂はじめ六名。存義派Ⅱ存義、楼川はじめ二十二名。フリーⅡ立志以下十一名となっている。

この中の紀逸は二代目だが、とにかく右の中に柄井川柳の名はない。八十名の宗匠の系列を離れ、無名庵で編者の側にいる。ここに花久の師川柳に対する格別の意図をくむわけだ。

ともあれ花久は、柳多留を世に送り出し、そして生涯をそれに賭けた人物である。それだけに柳多留門中も畏敬していたらしい。

—根の生えた立看板を花屋出し(樽35)

—幽霊の止り木花屋門に植え(樽60)

—花屋久治を植木屋と下女思い(樽34)

—面かげは花屋に残る川柳(樽78)

彼の住居には柳多留にちなみ柳の木を植えて看板にしていたらしい。



八木敬一

俳風柳多留廿五篇研究

—(二九丁)—

西原	亮・鈴木	黄・室山三柳
入江	勇・清	博美・八木敬一
紀内恒久・青木	迷朗・故岡田甫	

522 通俗の小便無用鳥居也

西原「普通『小便無用』に鳥居の絵がかかれてある。ふつうでないのは八風流で、紀の国屋文左衛門の故事がある。『吉原雑話』に「其角は紀文がたいこ持のよふにて、常々この里へ来りける。或時、茶屋にて短冊を出して紀文に発句をこのみければ、酔狂のあまり、此所小便無用と書たり。其角、傍に有て、花の山とつづけたりと」

八木「賛。

小便をきれいにふいた花の山
鳥居でも書くかと思や花の山

一「句出典不明なれど、『川柳大辞典』にあり。

岡田「賛。

523 古風なほれやう一心命なり

西原「『色道大鑑』六に「いれずみ」のことがあり。

勘兵衛 といふものに カンサマ命

十兵衛 といふに 二五 命

などの例を挙げている。主題句は人名ではないが、心意気を表した「一心」と、定法どおりの「命」をもつて一般化している。

惚れた人へ、腕にほりものをするのは、玄人に多いが、男女にもまれに素人にもあったらしい。しかるに、そのような惚れ方は、もう古い古いといっているところに、この句の現代性を認めるべきか。

母の名は親仁のうでにしなびて居 二・二
室山「同。一心如鏡」は太助の腕の刺青であ

るが、男あるいは女が情において「——」一心「——」と彫った例があるのであろうか。
入江「心意気をあらわした「一心」とか「命」は入墨といわず彫物（ほりもの）」という。
入墨とは罪人のものに使う語である。

八木「入江氏説のように通常「……命」というようなのは「ほりもの」であるが、礎稿に引用された通り、『色道大鑑』には、「いれずみ」と記されている。

岡田「諸説に尽きる。

525 びりについてわれハわるかれ人よかれ

西原「『びり』は末尾のこと。

人の前面に出ず、常に人のあとにくつついて、我に悪るかれども、人様によかれという処世こそ大切なりとの人生訓らしい。中七、

座五は文句取りか。諺には見当らぬ。

室山Ⅱ同。昔の修身。「われハわるかれ人よかれ」は、おそらく親がいつも口癖のようにいっていたのであろう。

入江Ⅱ「びり」は、男女出入り。俚言に「人は悪かれ我善かれ」というが、大屋の前もあって「なんといいつてもわつちが悪うござんした。ゴカンペンを」。

清Ⅱ入江氏説に賛。

八木Ⅱ同。びりは「びり出入り」のびりであらう。

岡田Ⅱ同。

525 お祭りがいやさに美濃へ嫁入する

西原Ⅱ古い時代、近江国筑摩社で鍋祭りがおこなわれた。例えば、伊勢物語、男色大鑑、諸国里人談などに記されている。ここの女は、その年に関係した男の数ほどの鍋をかぶって祭礼に参加するという。この奇祭は、古代にあっては逆に自慢入男にもてたというVを表現したものと解される。

摺子木を差すべき筈を鍋かぶり 二二・ス10
女に業をはたかせる神事なり 二四・7

ここの美濃へは近い。この祭りがいやさに隣国美濃へ嫁入したがるというのである。

室山Ⅱ賛。「嫁入したがる」でなく、「する」。別義の「お祭り」をちらつかせたところがミソ。

八木Ⅱ同。美濃と近江はくつき合っており間に山も川もない所がある。

手にさげるよりもせつない鍋祭 三六・9

526 千金のあかりで式部夜なべなり

西原Ⅱ石山寺で源氏物語を執筆する紫式部。

ここのは、近江八景の一で、石山寺の秋の月として賞される。千金のあかりは明月。

柴の硯にうつる秋の月 三三・26

室山Ⅱ同。八月十五夜の湖を観て、須磨・明石の巻あたりから書きはじめたといわれる俗説もあり。

青木Ⅱ同。

びり出入名月の夜に書き初め 末二・26

岡田Ⅱ紫式部が旧八月十五夜から、石山寺で「源氏物語」を書き始めたというのは、インキキな俗説。しかし一般には、この俗説が横行。

527 百のうははに駒引のあるおたか

西原Ⅱ御鷹匠組頭は二百五十俵高で、戸田家

内益家に各三人と「徳川幕府の制度」はのべ

る。駒引は「辞彙」に「乗馬の異称。御鷹匠組頭は馬に乗る定め」とし、主題句を引用して、下注に八御鷹匠組頭の乗馬Vとする。

「百のうはは」は、百の上羽で数多い上等

鷹、その中でも御鷹匠組頭が馬上にあって、据えられる名鷹を賞讃した句であらうか。

入江Ⅱ礎賃。「うはは」は、上端・上役・頭などを指す語。

岡田Ⅱ御鷹匠組頭は百俵の知行をもらう上に、馬に乗れる……という意。それに駒引銭をかちませたところが、句のヤマ。

528 叩くとばちがあたるよと金屏風

西原Ⅱ借りてきた金屏風。こどもに注意を与える。叩くとバチは縁語。

手はしこくして呵られる金屏風

室山Ⅱ賛。たいせつなものについて、小さい子によくいうせりふ。 二九・30

岡田Ⅱ礎稿に「借りて来た金屏風」とあるが、借り物だったら、子供など傍へも寄せつけられまい。広く高価な金屏風と考えた方が無難。

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

黒川紫香

会者定離海までは行く川の旅

八木 千代

会うものは離れる悲しい定めはどうしようもない、川には筋があるので連れ添う事も出来るが離ればもう会う事が難しい海は広くて大きい。最近御主人を亡くされた千代さんのお氣持が胸を打つ。球根の力に負けた寒の土

月原 宵明

寒さに耐えて来た土も目覚める時が来た。胎動する球根はいち早く春を感じているのであろう。

極限に張った輪ゴムの身を案じ

榊原 秀子

輪ゴムにも老いと若さがある、若い輪ゴムはよく延びるが身の程知らずとか切れた瞬間どこへ飛んで行くか判らない。現代の若者を案ずる母の氣持ちを代弁していてなかなか妙である。

方円に従う水にもある迷い

浦野 和子

落ちて滝となる水もあれば紆余曲折を重ねて用水となるものもある。水にたとえた女心をうまく出している。日記帳ひとりの冬が動かない

西山 幸

静寂さがひしひしと感ぜられる句である。ひとり綴る日記が心を癒やしてくれそう。引き抜いた白髪を獲物のように見る

大矢 十郎

憎さも憎し、とまでは行かないが歳を感じ初老の氣持がうまくとらえている。私の様に白髪に覆われてしまおうともう観念するより他はない。

錦織 文子

雪国でなければ聞く事が出来ない感動である。今度は貴女の寢息がかすかに響いて来そうだ。

豆で逃げる鬼ならベットにして見たい

平田 実男

現代っ子にはもう鬼など怖わがらない、怪獣ドラキュラー等氾濫する中で一番恐ろしいのは矢張り人間の鬼かも知れない。ベットに出来る鬼がいたらと私も思う。

鳥かごの広さの自由しか知らず

神夏磯道子

拙句に、かえっても籠の世界にいる卵と云うのが、人間のエゴが鳥の自由を奪ってしまったが果してこれ等の鳥が

自由を得たとしても生きて行けるだろうか。

言い方もあろうに言葉に角が立つ

西川 善紫

自分で気づかないが相手の氣持を悪くする言葉を簡単に吐く人が居る、心しなければならぬと思う。

転ぶだけ転んでどん栗根を下ろし

小谷 仙山

どん栗をとり上げた所に面白さがある。朗らかさがこの句の命か。

昼の風呂豚舎の父を呼びにやり

久家代仕男

豚舎の中で泥まみれになっている父の姿がほほ笑ましく浮ぶ。昼の風呂がこの句を生かしている様に思う。

おみくじの嘘つき縁がまだ遠く

榊田 英詩

コンピューターの時代でもおみくじに運をかけてみる娘が多多い、嘘つきと決めつけてはいるが本音はどうか知らず。

医者がえても同じことを言う

小西 雄々

生々庵先生には悪いが時としてお医者さんが残酷に見える時がある。でも句主は何を期待されたのか知らないが、お医者さんを信じて欲しいものですね。

高見山星を残してほっとさせ

前山 北海

負けても勝っても高見山には独得の味があり人氣が失せない、負け越して十両に落ちて欲しくないのも北海さんならずとも。

西尾菜句碑建立 除幕式と記念句会



一步出ずれば 我れ 旅人となる心 水鶏庵 菜
とき 昭和55年5月18日(日)正午除幕式(神式)

ところ 八尾市・割烹・日本海前庭

近鉄八尾駅下車駅正面バスターミナル近鉄バス
瓢箪山行又は恩智行に乘車八尾木下車

祝 辞 記念句会
川柳塔主幹 中 島 生々庵

兼 題 川柳塔副理事長 河村日満氏選

菜の花 N.H.K.川柳選者 川村好郎氏選

水 川柳塔社副理事長 去来川巨城氏選

鶏 日川協常任理事 磯野いさむ氏選

旅 日川協常任理事 三條東洋樹氏選

一 日川協副理事長 山田良行氏選

席 日川協常任理事 西尾 菜謝選

会 場 日川協副理事長 西尾 菜謝選

会 費 五〇〇円(作品集・軽食含む)

懇親宴 二、〇〇〇円(夕食)

句碑建立委員長

同 日川協理事長 中 島 生々庵

同 川柳塔主幹

同 副委員長 富柳会々長 阿 部 柳 太

同 副委員長 川柳塔副理事長 橘 高 薫 風

同 代表委員 高 杉 鬼 遊

同 代表委員 香 川 醉 々

同 代表委員 板 尾 岳 人

趣 意 書

この度、川柳塔同人有志の発起により、西尾菜氏の句碑を八尾市八尾木公園に建てることになりました。

氏は川柳塔の副主幹として塔社経営、企画に参画し又、同人選者として卓見をもち昭和五十一年より日本川柳協会常任理事として活躍し今日に至っております。

なお、昭和六年七月阪大川柳会に入会して故麻生路郎先生の指導を受け、柳歴正に五十年に達した喜びをも含めての企画であります。

ついでには菜氏等知の皆さんにも左記要領でお力を貸して戴ければと存じまして御案内申し上げます。

記

句碑建立基金

一金壹千円也(お一人一口)

昭和五十五年二月吉日

句碑建立委員長

日川協理事長 中 島 生々庵
川柳塔主幹

▼基金窓口〒542 大阪市南区鰻谷中之町二〇 川柳塔社内西尾菜句碑基金係

または〒581 八尾市中田二丁目三〇二 高杉鬼遊方同係。

水煙抄

菊沢小松園選

今治市 矢野佳雲

刻々と囲みとくよう牡丹咲く
 反対をすると一部の声といい
 親と子の大事なものがくいちがい
 アル中のとむらいやはり酒になる
 体当りする気のひざは曲げておく

京都市 山本桐下

妻子には用意してある避難場所
 こころまで売らぬヒエロのベレー帽
 使われる弱身を言わぬ隠し芸
 石ひとつ蹴れない靴を日々みがく

名古屋市 越村枯梢

夢一つ詰めて飛ばしたシャボン玉
 断酒した男の家は酒造り
 騙されて回りつづける独楽の赤
 蓬髪に天道虫がぶら下がり

鳥取県 和井親洋

御祝と何度書いても好きな文字

よう切れる男言葉に錆が無い
 小さな芽春はそこからリズムとる
 湯気吹いて吹いて笑顔を取り返えず

大阪市 西出英子

お茶入れて小さな思案と向い合う
 啓蟄に何思うてるアスファルト
 コート脱ぐ春の息吹を受けたくて
 父の酒減った安堵と淋しさと

大阪市 堀口欣一

焼肉と冷麵智恵のないはなし
 立飲みのどれも恐妻家らしい
 陸軍というものありき三宅坂

旭川市 朝倉大柏

汗しみた拳骨だからよくこたえ
 妥協するわびしい咳を抱いて寝る
 手品師の帽子がほしい朝がある

島根県 松本文子

いやなとこばかり似てる子の仕草
 燃えぬ男と翔べぬ女で夫婦和す

アルバイト銭の重さを知った顔

島根県 木村 はじめ

王様の如く眠れる孫の顔

往復切符だから安心して待てる
健康の証しお腹が空いてくる
生きのびて夫婦は火薬を捨てました

人生に信号がなく又迷い

吹田市 藤原 世史春

平凡に生きてることのむずかしき

相撲取り体のような声を出し
土俵入り拍手の音で知る好調
引き揚げる背中が笑う勝力士

大阪府 小谷 清 女

義理と云う軽い祝儀の包みなり

堺市 大道 美乙女

式服へ精一杯の女見る

喝采はなくともはげむ芸の道
ぼちぼちと春の匂いの絵具皿

強引に引けば中途で切れる糸

鳥取市 森田 熊 生

大阪市 林 ひろ子

雨の中賢い鳩は軒の下

熱燭をチビチビゆるそうかと思う
なるようになれと落ち着く腹をきめ

盛花に温室育ちが顔並べ

死ぬ一歩手前の話を笑われる
新妻を連れて倅せ見せに来る

なんとなくお茶の時間の顔馴染み

三重県 川上 溪水

岸和田市 吉水 照 江

方言の九官鳥は河内弁

夕映に惹かれて哀し子守唄
梅描けば梅もむずかし冷える夜

年金も貯めて残せばもめの元

大和高田市 岸本 豊平次

手紙より声が聞きたく電話する

八尾市 高杉 千歩

島根県 園山 栄

消えて行くだからきれいなしやばん玉

梅描けば梅もむずかし冷える夜

子は親の傘のしづくをはねかえす

今日ばかり急いで明日を見失い

赤い灯にのたうちまわる罪幾つ

温室で咲いて花屋で冬に会い

今治市 渡辺 南 奉

ランドセル春へちっちゃい指を折る

東予市 小山 悠 泉

友情の握手明日も逢えるから

組板のリズムに妻の詩がある

月給日キヤベツをしかと抱いて妻

セールの野心は庭の花をほめ

東広島市 坪島 美津江

出雲市 板垣 夢 醉

若草に燃えつく火種ならばある
食えるから再就職に好き嫌い

今治市 新居田 胡頹子

良心の苛責に悩む嘘ひとつ
組板に昨夜のしこり刻む音

米子市 野坂 なみ

裏道で早いつもりが行き止まり
剪定に梨たくましい実を結び

福山市 桑田 静子

小鉄の切っ先哀しいまでに切れ
模様替えやっぱり元へ置く机

大阪市 藤森 小雅子

何にもかも上がり烈火の双手を上げる
触れさせて女は淡い思慕を抱く

大阪市 田口 なりこ

針仕事そと着て見るお振袖
省エネに骨董品が顔を出し

大阪市 橋元 美恵

幸福に慣れてないから不安です
あまりにも記事の中味が身近すぎ

大阪市 岡田 ふみ

断わった旅行のプラン読み返す
義母さんの喜寿をどの子も云い出さず

豊中市 満仲 きく子

こんにやくと豆腐の厄日針灸養
白梅に雪舞うそんな故郷どす

大阪市 野田 君枝
ドラえもんひな壇にまで並べられ
ひな壇に侵略されて狭く寝る

鳥取市 中森 葉士人
もう魅力なくしたエクボにめぐり逢い
ストローを曲げ折り好きとまだ言えず

鳥根県 山根 峰雪
回復と共に忘れる養生訓
矢印をつけて裏まで書く手紙

唐津市 浜本 久仁於
叢に坐れば春は膝の下
春うらら冬眠醒めぬ寝釈迦仏

鳥取県 石井 雅水
聖職の仮面を二次会はがさせる
逆ろうて見る親もなし喪に服す

兵庫県 市橋 茂樹
区切られた繩の向うが気にかかる
満開の枝を片手が折りたがり

熊本市 有働 芳仙
一握りの人生なれど灯をともし
汚職から外れ出世の機を逃がし

唐津市 浜本 義美
酒含くみ紙の白さをじっと視る
電気ガス春の嵐を煽りたて

唐津市 田口 虹汀
絵日記に子供の夢が描いてある

半分は妻が飲みます養命酒

兵庫県 伊沢午郎

痴漢にも敬遠される年になり

町内も郵便で来る請求書

米子市 寺沢みど里

着ぶくれた余生へ省エネわびし過ぎ

残業の夫へ空腹がまんする

唐津市 山下勝一

真実はあの世で仏だけが知り

岸壁の母より強い寡婦となり

米子市 菅井未知

夢やっとなつて小さな家が建ち

祝入園孫にも読める字で綴り

兵庫県 中田白李

関白の位は妻へゆずりたい

中流の意識定年後も消えぬ

和歌山市 堀端三男

定退の気楽さ二食で事が足り

ささやかなゆとり年金今日入る

和歌山市 坂部紀久子

ねむい朝地獄の底からベルが鳴る

踏み出せば戻れぬ一步と心極め

寝屋川市 立床晴風

おらかな素顔に戻る風呂上り

汗じみた手で愛情を握りしめ

岸和田市 原さよ子

三猿の教えも変えた民主主義
薬箱ほこりだらけにして達者

岸和田市 吉田とも子

わたくしが折れて毎日平和なり

家庭では茶漬ですます社長さん

米子市 雑賀美世

恍惚の老父へ無言のお茶を入れ

かなで書く孫の返事に手間が入り

倉吉市 今村夕路

仲直り三者あきれる程になり

落椿ふと人生の無をさとする

岡山市 柳原孝柳

人間の脆さを愛は知っている

頂上で雲の話が聞えるか

箕面市 上西康允

貧乏も何とか生きて芸の内

正直なだけで大臣務まらず

富田林市 中村優

額はめて裸婦像人の眼に慣れる

考えるポーズ親爺で絵にならず

山口県 高崎雀声

浩宮恋もしたかる菊の園

狭い海他国にコビを売り稼ぐ

呉市 山根里香

中年の歯車油のきしむ音

一言にこだわる愛が消えそうで

空瓶に愚痴いっぱいをつめて捨て
 ひとり風呂幸せの色湯気の立つ
 巽をもつ女素顔は見せはせぬ
 避雷針につき刺されてる寒の月
 町田市 竹内紫鏑
 定年後二十年ある薄暮かな
 すり切れた畳に老人会写る
 羽島市 伊藤静枝
 春一番火事のニュースをのせて来る
 誘われる旅も信仰心の名のもとに
 寝屋川市 高田てまり
 散る勇氣あるから桜咲いてみる
 忘れていた言葉に出会う古都の町
 鳥根県 岩田三和
 柔らかいとこをやや兎にはほぼらせ
 水口に集まる鯉は春がほし
 出雲市 石倉英佐子
 すつきりと髪結い上げて喪が明ける
 和歌山県 時田誠一
 シヤボン玉と知りつつ尚も緋り付き
 羽曳野市 麻野幽玄
 恐れてたてつちり雑炊まで啜り
 諫早市 江副二牛
 万一と思うた我が子が少年A

鳥根県 堀江百代
 大阪府 白石潔
 出雲市 吉岡きみえ
 神様の目こぼれあの娘まだ嫁かず
 尼崎市 小林文月
 応援の力で一点稼いでる
 新宮市 辻戈
 髪型を変えて残り火かき立てる
 米子市 青戸美佐
 啓蟄だ私も散歩に出かけよう
 高槻市 竹内花代子
 帝国の社名に気骨の創業者
 大阪市 大野武太
 尾鷲市 渡辺伊津志
 方便の嘘に鼓動が響くなり
 大阪市 岩田八文銭
 核心にふれると記憶逃げて行き
 島根県 星野脩正
 もう春と言うのにベッドが放せない
 高知県 山下登舟
 無人駅花につられて途中下車
 交野市 山本テルミ
 朝帰り名刺が落ちている証処
 尼崎市 中辻千子
 女として破目ははずしたときもあり
 兵庫県 山根左春
 銀婚のデートの足は寄席に向き

唐津市 筒井朴竜
ピカピカの夢背負わせるランドセル
唐津市 桑原掬治

飼主に似たベットもあわてもの
新潟県 高野不二

日教組子には教えぬ事をする
熊本市 北川一進

女にも男にもなる舞扇
岡山市 池田半仙

隙のない紳士吸殻ぽいと捨て
寝屋川市 福富隆子

実験の小石で列車転覆す
鳥取県 羽津川公乃

スムーズなお悔み受けて白々し
大阪市 本多俊子

四つ切りのキャベツが小さく小さく見え
唐津市 仁部四郎

薄紙のようにはげよと処方箋
倉敷市 大森登竜

種馬という花道は人にな
島根県 福岡芳枝

山奥へすまんすまんとボンベ行く
浜田市 佐々木裕

子防線張って息子は切り出した
鳥取市 武田帆雀

白魚の指より載く勘定書

和歌山市 富上光代
逢いにゆく余熱の温みだけ信じ

居乍らに旅情に浸る時刻表
尼崎市 中谷利美

そつと買ひそつと仕立てて孫に着せ
島根県 岩佐富子

子の寝顔闘志もりもり湧いてくる
八戸市 島田昭治

立ち読みでヌードのとこだけめくるとき
大阪市 平井露芳

七十坂夫婦の歩幅合いかける
兵庫県 野々口ゆう也

説教を逃げる口実いつも風邪
徳山市 徳重馬笑

ひとり飲む酒ひとり酔うべししゃばん玉
広島市 すがかつこ

縫針の英字に明治引っかかり
泉佐野市 大工静子

コーヒーのスプーンが本音かき廻す
出雲市 園山多賀子

検温の声でベッドの朝が明け
大阪市 越田寿幸

思いきり母と叫んだ流れ星
長野県 岩崎和子

百才を養老院できく祝辞
倉吉市 野中御前

倉敷市 中島彩平

岡山市 串田句味地

ほろ苦い橋も渡って共白髪

米子市 桑原伊都

春の陽に目覚めた蛙まだ跳べず

岡山市 砂田静佳

二月終え白紙の続く日記帖

榎原市 西本保夫

定年へ出世を口にせぬ妻と

宮崎市 野口佳愁

木枯に扉は悲鳴に似て軋み

豊中市 出口セツ子

神戸市 久保禎三

小言云う妻も隔れば淋しがり

東大阪市 三宅哲夫

そのものずばりの表現園児の絵

岐阜市 市川鱗魚

石には成らぬ男の持っている悟り

冷酷になるとノルマが飛びこせる

夕風のゆとり若き妥協せず

少し走って酒の羅漢はひとり者

十字架の重さを罪にして転ぶ

雅号ぶつちやげばなし

とらいい

(187)

四十三年春、病を得て羽曳野病院に入院中、謂わば精神的にとんだ底の中心の支えになつたことか。(1)青息吐息で辛うじて生きて来たおのれ。(2)この上は何ごとにもまともにTRYして行こう。(3)俳句が去来ならこちらは吐来。云つてみれば、これ等慨嘆と気負いをかき混ぜた思いで命名したのが「吐来」である。立派な雅号ではないが病の床からスタートした当時のひた向きな心を忘れないためにも、いつまでも大事にして行きたいと思う。残念ながら未だ誇るに足る命の句はものしていないが、名の如く終生TRYの精神でドン・キホーテ振りを発揮したいものである。



えのもと

榎本吐来

榎本吐来 (187)

(銀行員・49才)

寝屋川市老人福祉センター娛老会

川柳句集「踏景」

序文は北川義男寝屋川市長、高鷲亜鈍氏が、「人生と川柳」と題して執筆されている。また里小路氏が亜鈍氏を助けて指導に当たっておられるが、いかにも楽しそうな老人会である。

亜鈍

悠ゆうと殿りをいく身にゆとり
公報に載せてもらった菊の出来
小路

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

谷垣史好

母のこと一杯詰めた冬の天

渡辺伊津志

春や夏の空と違って冬の空には人の心を内に向けさせる重さがある。一木一草、目に触れ耳に入るもの凡てが亡母の追憶につながる日々。やがて四季がめぐり、時の流れと共に悲しみが薄れゆくのを待つより仕方ないのであろうか。

ふと父の弱さに触れた仁王門

越村 桔梢

白柳さんの有名な「春日遅々として仁王さんねむくなり」の句とこの句を二つ重ね合わせてみると、そこに映し出されるのは、まされもなく肩肘張って気張っているが実は気弱な男のイメージであるだろう。

墓洗うどの子の影も崩れない

山本 桐下

五十三才で死んだ私の父は無類の酒好きだった。敗戦後はヤミ市であやしげな

酒を買ってきては飲んでた。そのために命を縮めたとは私は思っている。生きていた間は父を憎んでいたが、自分がその年齢になってみると酒に負けた父の気持が分るような気がする。せめて墓前に酒を捧げて遅ればせの孝行をしよう。子らもみな成長して、父の記憶も遠いものになってしまった。それでよいのだ。

ストレスを溜めて畜車よく軋み

池田 半仙

最近、三十代、四十代の働き盛りが或る日突然ポックリ死ぬのが増えたと聞く。脳溢血とか心筋梗塞とか一応死因は付けられるが、何故そうなるのかは全く分からない。企業社会の管理体制ががちり組み込まれた働き蜂にとって、歯車の一つと自覚はしているもストレスが溜まることだけは確かである。潤滑油として何か趣味を持ちましよう。

番犬がなつけば殺せと云う指令

園山 栄

ギャング映画の一場コマを思わせる。秘密を知りすぎた奴、己れの分を忘れた奴は早晩、消されねばならぬ。何も無法者の世界だけではない。多国籍企業やCIAの内幕など読むと、そこにも、われわれが想像もできなかった。悪の論理が冷たく支配していることを知るのである。善人であることの幸せよ。

歯が痛いのので決断が早くなる

矢野 佳雲

肉体的条件が精神構造に微妙な影響を与えることは日常よく経験することだ。この場合の決断は、積極的な意思の動き

というよりも苦痛に伴う思考能力の減退、いふなれば諦めが先に立ったということだろう。大平さんも時々、歯が痛くなればいいのに……。

食い逃げのかまえて雀二羽三羽

桑原 掬治

パン屑を庭に撒いて物蔭から見ている。雀はなかなか下りて来ない。お前、先に行つて様子見てこい。「こいう時は先輩からどうぞ」「じゃジャンケンで決めよう」「よせよせ、やばいぞ。ピークオーバー」。そのうち勇敢なのが「羽乗りこんできてパン屑をつつき出す。続いて二羽、三羽。

人間を信用してもらうまでには時間がかりそうだ。「逃げ鷹」がほはえましい。

悪い事したなと思う中は無事

田口 虹汀

知っていて悪いことをするのはマジな方。悪いと知っているから、そう大した悪いことは出来ない。知らないで悪いことをするのもまだ救われる。いちばんいけないのは、いいことだと思つて悪いことをすることだ。いつかラジオで聞いた話。反省だけは忘れまい。

カレンダー何をしたかと問うよう

時田 誠一

だから私はカレンダーよりも「日めくり」が好き。一日を破り棄てると、バックと目の前に新しい日が現われる、この新鮮さ。格言など入っているのもまた楽しい。五月一日をめぐつてみると、こう書いてあった。「新しい朝だ、嬉しい朝だ、自分のための今日が始まる」。

作品へ影響を与えるもの

随想風に

山村 祐

芸術作品へ影響を与える要素は種々雑多だが、これを人為に關係する要素と自然に關係する要素に分けて考えてみよう。

(1) 川柳の社会的環境について

人為的な要素とは何か、と言えばその作品がどのような社会から生れ出たものなのか、を考へることから始まるであろう。

社会の移り変りを辿ると、1)狩猟採集生活が中心であった縄文晩期まで、2)農耕共同体に基盤を置いた近世未まで、3)資本主義的生産に入った近代以降とに大別される。更に農耕時代を細かに眺めると、貴族支配の古代社会と、武家支配の封建社会に分かれる。そして同じ封建社会でも、中世と近世とは異質な性格が生れている。

これらの社会に新しく生れ、成長した芸術の流れを辿れば、縄文土器と弥生土器の比較から始まって、例えば古代貴族社会の雅楽、中世武家社会の能、近世町人の人形浄るりや

歌舞伎、近代以降の諸芸術などに、それぞれ社会の特質が窺えて興味深い。そして、中世まではほとんどその社会の支配層を中心とした芸術であったことが特長的だが、近世に於ては、その辺の事情がやや複雑化してくる。

中世に引続いて近世も武家支配の社会ではあったが、その内部に町人層の充実が深まるにつれて、彼らの思いを代表する古川柳が誕生し拡まっていった。(両者の中間に位置した武士、地主、富裕な町人たちの誹諧は、中世からの伝統を濃く受継ぐと共に、新たな変革をも懐いていた)

古川柳の發生と抬頭は、武家支配の社会であるにもかかわらず、町人の経済的優位と、文化の底辺への浸透という社会的背景を抜きにして語ることは出来ない。支配される側の庶民の間から湧き興ったたくましい歌声であり、まさに町人自身の思いを述べたからこそ、愛されもし、存在価値を不動なものとなし得

たのであった。

話とはぶが、最近篤学の古川柳研究者から丁寧なお便りを戴いた。私信なので假にA氏としてその一部を抄出させて戴く。

《初代川柳時代は、現代我々が考へているよりも、もっと上流の階級であつたろうというのが古川柳研究界の通説です(中略)句の内容がとても熊さん八つあんにゃは詠めぬものであること、それに大きいのは万句合に書き入れられた作者名のこと、旗本や御家人等、武士階級や町人の知識層が多かつたのではないかと考へられています。田安宗武も投句したかと思われ資料もあります》

この手紙を読んで私の連想へ浮んだのは、昭和初期のプロレタリア芸術運動の荷い手たちの姿であつた。それらの文学者や演劇人には、明らかに上流階級出や金持の子弟も混つていた。しかし彼らはその出身階級から脱出して、プロレタリア階級の思いの表現を行つ

たのである（いわゆるインテリ出のひ弱さも指摘はされたが）もちろん江戸期と昭和期とは社会構造が全く違うので同列の比較は許されない。しかしどこか似た現象も見受けられる。古川柳の成熟時代は町人層の経済的優位が確立した反面に、武士の支配体制の矛盾が到る処で噴出し始めていた。形式化し固定化した身分制のなかで、武士自身も窒息感を感じて、闊達な町人的生活を遠望し、そこへの逃避を考えた一部の武士たち。その姿が万句合への投句者と二重写しとなって映ってくるのである。

しかし昭和初期のプロレタリア作者たちと違って、武士の場合は身分や生活はそのままていて、単に精神的逃避に終っていたところに、両者の決定的な違いがあった。それ故に、武士たちのリーダシップが加わるのと反比例して、古川柳は次第に活気を失い、類型化と観念性を深め、狂句化の傾向を強めていった。四世川柳、人見周助がそのよき一例である。彼は八丁堀の同心で後に与力にまでなつたとも伝えられるが、同時に川柳風狂句の宗家でもあった。

新進気鋭の古川柳研究者、岩田秀行氏の数年前の論文「雑俳前句附における川柳評の位置」からは興味深い提言が聞かれる。雑俳前句附から「川柳風狂句」確立への性格の推移を説いて、両者の性格を明確に区別した上で、川柳風狂句の特質として、始め「浅黄裏」であったのが単に「浅黄」となつて野暮

の象徴語へ定着してゆく過程を説き、次のように結論している。

「最初に発見した時には、あたらしい見つけどころや、奇抜な個性であったものか、川柳という様式が固定化し、独立するにしたかつて、類型化し、一つのパターンを作つてゆく（中略）つまり「川柳風狂句」という新しいジャンルの形成は、形式的には附句の独立（独詠句化）であり、内容の面からいへば、新しい表現の発見とその言語的定着（類型化）ということにならう」

岩田氏の結論は次のような響きを伴つて私に聞えてくる。「武士のリーダシップの増加と松平定信の文化弾圧などによって、古川柳固有の（町人特有の）潑刺とした活力がうすれてゆき「川柳風狂句」の観念性が深まっていた……」と。

初代取月らによる享保の新風から始めて四世川柳らの文化文政期に至る僅か百年間の、封建社会後期の歳月を切抜いて眺めただけでも、古川柳の性格はこのように著しい変貌を示したのである。

まして、封建社会から近代資本主義社会へ突入して既に百年近くを経た現代川柳が、その性格を飛躍的に変化させてきたのは当然である。しかしその変化についての一般社会の認識は依然として低い。今も「川柳即古川柳」の状況と言つても過言ではない。

私事に亘つて恐縮だが「新・川柳への招待

」の反響の中に、楠本憲吉氏と共著について「木に竹を継いだよな」という感想が柳俳の一部から寄せられている。このことは実を言うところから懐いていた私の意図が半ば達せられたことにもなるのである。楠本氏の古川柳への造詣は広く深い。特に資料の豊かさは抜群と聞いている。氏が流麗、的確な筆致で古川柳の評釈をされたために、私が筆下りに掲げた八〇〇句近い現代川柳作品との対比的な鑑賞と、現代川柳研究の場とを、一般社会人の前へ提供し得たと思う。古川柳と現代川柳との異なるよさと、性格の違いとが浮び上つたのではないだろうか。新・川柳への招待」の批評は三月に入つて出始めたが「短歌俳句、川柳を比較考察した部分は、短詩型文学論として他ジャンルの作者にも読まれるべきであり」（週刊読売）また「川柳という文芸に對して、認識を新たにさせられることは間違いない」（週刊現代）という感想は現代川柳への一般の認識の半歩前進を語るものではないだろうか。

楠本氏の旧著「戦後の俳句」には奥室教市氏らの作品も紹介されているが、川柳の著作や雑誌がほとんど川柳内部でのみ読まれている現状では、楠本氏でさえも現代川柳作品に接する機会はそのほど多くないのではないかと想像している。まして一般の人々の場合は尚更である。現代川柳作品の外部へのアピールは、今後とも機会ある毎に川柳一人一人が実行してゆくべきテーマではあるまいか。

（次回②は「句と風土」の予定）

愛染帖

橋高 薫風選

大阪市 河野君子
 春彼岸生き仏さんに逢いにゆく
 財布の紐に私をくくりつけておく
 笑い声立てねば自分を偽れぬ
 青森市 工藤 甲吉
 大地胎動木の芽も草の芽もうなずく
 男なりロマンチックを失わず
 鳥取市 河村 日満
 嘔吐きの男が好きなたち
 年寄りの肩鋭角に刺をもち
 今治市 月原 宵明
 黒だけで僕の自画像こと足りる
 整列をして止り木はみな庶民
 町田市 竹内 紫鏑
 製室幹部言うことなくて去る
 にこりともせず評論家著名なり
 和歌山市 桑原 道夫
 おもちや屋の猿を乞食の顔で見る
 女から借りたる金はポケットに
 倉敷市 田垣 方大
 魂が触れ合う桜花爛漫と
 香川県 三井 醉夢
 寒梅に五十路の背すし通すなり
 野の花を多情多恨の壺にさす
 島根県 梶 みどり
 菜の花を生けて心の窓明かり
 耳底に聞える声に見守られ

高知県 山下登舟
 衣食住足りてまだ振るストの旗
 長電話コードのよじれ直しつつ
 和歌山市 堀端 三男
 孫が出す牽制球によくかかり
 孫達のチームワークが楽しくて
 青森県 五十嵐 操史
 反撥を期待している眼と思う
 倒産を整理してから人変る
 鳥根県 榑原 秀子
 冬空に火花がほしい倦怠期
 散らせてはならぬ花散る冬の午後
 今治市 越智 一水
 女性駅長敬礼すれば美しい
 春宵や妻もいっぱい呑むと言う
 羽曳野市 麻野 幽玄
 蟻の一穴を思う噂を聞く酒席
 あの方も行かれますよと誘われる
 大阪市 川口 弘生
 アベックの尻に古墳の主苦笑
 小さな森に小さな森の神が住む
 唐津市 岩崎 実
 自転車に似合うくずれた築地塀
 鳥取市 中森 葉士人
 愛想笑いしても注射は打つらしい
 大阪市 小出 智子
 他人ほどに母にやさしきこと言えず
 八尾市 高橋 夕花
 亡父の舟亡母の舟ゆくむこう岸
 京都市 松川 杜的
 良縁を願う絵馬の絵を考える
 和歌山市 若宮 武雄
 愛薄き顔顔顔よターミナル
 今治市 矢野 佳雲
 春を恋う人には会わぬ雪だるま

鳥取県 鈴木 村瀧子
 無人駅さて人間はどこへ行く
 和歌山市 津田 与史
 人形が嘘をつきだす春の宵
 和歌山市 西山 幸
 貴婦人よ生立ちなどは語るまい
 島根県 山根 陟
 押売りが福祉を口にして歩き
 米子市 石垣 花子
 様な声で笑って女旅
 唐津市 浜本 久仁於
 配給のように野菜を切って売り
 米子市 柴田 英千子
 スコップに花の芽もらう日曜日
 兵庫県 遠山 可住
 思い出をしよう過ぎてる腰曲り
 島根県 小砂 白汀
 薄命の絵具ぬられし白桔梗
 富田林市 岩田 美代
 三振の男食べたい芋のかゆ
 羽曳野市 塩満 敏
 おいでやす北山杉のそらい踏み
 倉吉市 奥谷 弘朗
 省エネがやっぱり客足にも響き
 浜田市 佐々木 裕
 共稼ぎ話の続きはバスに乗り
 大阪市 江城 修史
 新雪へ落ちる椿に似た愛よ
 島根県 堀江 芳子
 熱ひいて飢饉やすごととベン握る
 萩屋川市 江口 度
 無病息災葉の方が風邪をひく
 京都市 山本 桐下
 掃除婦の折目崩さず母帰る
 米子市 野坂 なみ

吹き抜けた風に気楽な余生消え

岡山市

川端 柳子

赤道下衣替えするジャワの旅

米子市 林 瑞枝

七人の敵からリズムム当てられる

鳥根県 岩田 三和

こわい目がほどけていくよ児を見詰め

大阪市 西森 花村

転動を妻に知らせる腹の虫

島根県 福岡 芳枝

ジャングルの動物たちは足るを知る

堺市 伏見 茂美

春がもう新芽の先から飛びだすぞ

東子市 小山 悠泉

満腹の足ゆっくりと老夫婦

河内長野市 井上 喜醉

割込んで結局座つていなさらず

川西市 戸田 古方

老妻にまだ見栄があるコンバクト

兵庫県 中田 白李

販売機人の情をうすくする

島根県 木村 はじめ

ある日ふと落葉の気楽さを憶う

高槻市 若柳 潮花

散るときの花の叫びが見えている

兵庫県 辻 文平

見えぬ目に涙をためて聞くドラマ

島根県 堀江 正朗

土に寝る人生を見た天王寺

倉敷市 中島 彩平

坂上るのは男転がるのも男

和歌山市 松原 寿子

材料をあれこれ吟味普茶料理

愛知県 池田 香珠夫

月の夜に砂紋が崩る呼吸音

唐津市 浜本 義美

沈丁の香りへひそむエヒログ

鳥取県 和井 観洋

北山の深雪杉は凜と立ち

富田林市 中村 優

連絡船島のくらしがよくにおい

唐津市 筒井 朴竜

止り木に止って日記に無い頁

和歌山市 浦野 和子

本当を知らぬ男の化粧品

羽咋市 三宅 ろ亭

己が腹いたためぬ程度仁をなし

大阪市 欄 山下 勝一

沈丁花星の子そつと降りてくる

枚方市 宮川 珠笑

新入生の鞆初心を詰めており

西宮市 朝山 千世子

若社長後見役がうるさ過ぎ

大阪府 欄 山下 勝一

目をつむり盲人信号聞いてみる

出雲市 高橋 可保留

廻る展望台に春愁捨ててくる

和泉市 西岡 洛醉

夜に咲く花に蜜蜂程集

鳥取県 清水 一保

這う孫の根性祖父の眼が捉え

岡山県 嘉数 千代香

政治論平行線の妻と居る

島根県 大野 醉夢

妻が居て子が居て老いの孤独感

今治市 新居田 胡頼子

迷いから醒めてレモンを厚く切る

出雲市 高見 鐘堂

左手も右手も稼ぐ観光地

島根県 藤森 小雅子

手形書く手がふるえてる高金利

八戸市 小泉 紫峰

円満な顔してボスの座をねらい

宝塚市 吉田 笑女

鍵穴に雪降る夜を待つしじま

大阪市 藤森 小雅子

激流の上でうそぶく丸木橋

名古屋市 大林 曲ん手

涙もろい母と二人の子は知らず

堺市 高橋 千万子

錆釘の抜けぬ古巣だから来る

尼崎市 黒川 紫香

知を誇る人の滑稽さがわかり

米子市 小西 雄々

酔ざめの水に夕べの酒の色

名古屋市 越村 枯梢

本心が鏡の中に跳ね返り

島根県 大森 孝華

フリージアうつる鏡の位置にいる

豊中市 満仲 きく子

私小説書けば寒けが這い上る

倉敷市 水粉 千翁

喜びは風がもてくるおくりもの

守口市 羽原 静歩

恍惚の何とも嬉しい笑顔くれ

和歌山市 福本 英子

めおと坂つづく叱られ合っている

神戸市 久保 楨三

狐雨赴任の夫に添うてゆく

米子市 佐伯 越子

強運を信じた女に花が散る

京都市 山本 規不風

大阪府 白石 潔
大阪府 坂口 公子
和歌山府 中川 幸一

大阪府 藤井 春日
大阪府 大野 武太
大阪府 岩道 博友

大阪府 北勝 美
大阪府 渡辺 伊津志
大阪府 小谷 清女

大阪府 串田 句味地
大阪府 高崎 雀声
大阪府 宮西 弥生

大阪府 八尾市 宮西 弥生
大阪府 春野菜出るまで使わぬフライパン
和歌山府 時田 誠一

和歌山府 鳥取県 羽津川 公乃
鳥取県 小幡 里風
鳥取県 別別の運勢夫婦で庇い合い

鳥取県 倉敷市 小幡 里風
鳥取県 出雲市 原 独仙
鳥取県 旭川市 朝倉 大柏

鳥取県 旭川市 朝倉 大柏
鳥取県 焦る手を運はするりとくぐり抜け
鳥取県 島根県 西村 早苗

満たされぬ心時刻表めぐる
三重県 坪田 冬花
奈良県 森田 カズエ

奈良県 森田 カズエ
大阪府 三宅 哲夫
大阪府 池田 半仙

大阪府 池田 半仙
大阪府 桑原 掬治
大阪府 直原 七面山

大阪府 直原 七面山
大阪府 宮尾 あいき
大阪府 竹中 綾女

大阪府 竹中 綾女
大阪府 清野 こう
大阪府 藤田 頂留子

大阪府 藤田 頂留子
大阪府 行天 千代
大阪府 石井 雅水

大阪府 石井 雅水
大阪府 菅井 未知
大阪府 今村 夕路

大阪府 今村 夕路
大阪府 雑賀 美美世
大阪府 青戸 美佐

大阪府 青戸 美佐
大阪府 野々口 ゆう也
大阪府 窮すれど通せぬ愚直自己嫌悪

大阪府 野々口 ゆう也

兵庫県 奥野 テル
室戸市 岬 風子
和歌山府 紀久子

和歌山府 紀久子
大阪府 坂部 紀久子
大阪府 桑原 伊都

大阪府 桑原 伊都
大阪府 原 さよ子
大阪府 孫の怪我痛み気になる寒い朝

大阪府 原 さよ子
大阪府 砂田 静佳
大阪府 裕福な他人の話鼻でさき

大阪府 砂田 静佳
大阪府 新岡 回天子
大阪府 古墳また新たな話題を持つ破片

大阪府 新岡 回天子
大阪府 柳五郎
大阪府 春一番南の国の花信聞き

大阪府 柳五郎
大阪府 稲岡 正之
大阪府 大輪の花を咲かせた根の重み

大阪府 稲岡 正之
大阪府 島田 昭治
大阪府 明日死ぬも怖くないぞと思うてみ

大阪府 島田 昭治
大阪府 武田 帆雀
大阪府 忍従の限度巻く紐短かすぎ

大阪府 武田 帆雀
兵庫県 円増 貞子
兵庫県 平穏になれて感謝を置き忘れ

兵庫県 円増 貞子
大阪府 仁部 四郎
大阪府 メモどおり職場旅行の土産買い

大阪府 仁部 四郎
平田市 久家 代仕男
平田市 黙々と私は歩く蟻の穴

平田市 久家 代仕男
出雲市 板垣 夢酔
出雲市 女房の眼に縛られる浮気虫

出雲市 板垣 夢酔
鳥取県 児島 与呂志
鳥取県 春の芽にお彼岸近い陽が当り

鳥取県 児島 与呂志

鳥取県 児島 与呂志

鳥取県 児島 与呂志

愛染曼荼羅 (上)

橘 高 薫 風

で今日の傷洗う」「倅せなきぬ裂く声も持つている」のように暗い翳りが色濃く内在して読者の胸にずしりと響くものがある。そして読四句や「雨は絹何とやさしい日してくれる」「孫出産夜明けの彩がすばらしい」の感慨や感動の純粹さが反面に拡がっている。

山根白星 (東京都)

原爆忌雲の果てよりナレーション

瑛瑤に胸乳の起伏こそ確か

真実がある屏籠の書き損じ

鶏のごとく絞めたい女あり

ゴールもう見えるめめしききたもの

川柳雑誌不朽洞の門下生の一人だから路郎のにおいを受け継いでいる。強いて云って都会派のロマンチストと云えるのは、「銀行の非情に因む大理石」「生やさんとする髭生えぬテロリスト」「窓きわにまします隠れキリシタン」の句で明らかである。

高橋夕花 (八尾市)

胸の中動きはじめた水たまり

つり橋の揺れを再びあこがれる

鬼灯が亡母よ亡母よと赤くなる

切手一枚ことの重さに気づかない

なにごととも知らぬ存せぬ寒の庭

この作者ほど感性の鋭い人はない。「水の中ぐぐりぬけたる尼僧の眸」「琴線に触れた言葉が雪になる」など例は幾らもある。「あやとりの糸から亡母をたぐりよせ」「わが母のように生きたし傘を干す」と、亡き母に繋がる作品が多い。

河野君子 (大阪市)

小出智子 (大阪市)

山の絵を買ってやさしくなつてゆく

七十はさほどに速きことならず

新しいカレンダーほど強くなし

風呂の湯を落すときにも流される

風花の舞う日を父の忌と憶え

好作家の中尾藻介氏が、川柳塔の女性ナンバーワンに推すのが智子さんであるのは、作

品に殊更気張ったところがなく深い内容と味

を盛ることの出来る句境にまで達しているからである。第一句の「山の絵」第三句の下

句の表現はこの作者ならではの感がする。

岩田美代 (富田林市)

みんな皆笑顔でみんな皆他人

秋の水人それぞれに昔あり

またひとつ憎しみ消えてすしを巻く

落ちそうな椿に言葉かけて行く

スランプの机蓮の花など如何です

如何はいかがと読むのがよい。この作者の個性は、掲出の句をはじめ「舶来のシヤホン

愛染帖が創設されて五年を経た。多くの作者がその個性のにじみ出た作品を寄せられたことに感謝し、来し方を振り返って見ることにした。選者自身大いに反省をさせられたが、投句者にも将来資すること大なるものがあるかと思う。

工藤甲吉 (青森市)

何足の靴で一生終るらん
一票へききょうも乞食とチンドン屋
航空機疑獄編隊群となる
ランランの分も一本お線香
霏々と降る白一色の曼陀羅華

新聞社の編集局を定年退職、奥さんを亡くされた境涯にある作者だが、氣力充実して作品には高い風格が備わっている。諷刺の句は群を抜くが人生派でもあり軽味の味も得難いものを持つ。「北の潮騒亡霊の声もする」「火の神をねぶたのゆれるときに見る」「ひつそりと塗師の陰に木地師いる」など郷土色豊かな作品も多い。

いつからか父の炎は背で燃える
尤も得意なポーズで階段下りている
一冊の本に背すじのしやんとあり

傷口に釣糸垂らす女がいて
矢印を進めば進むほどの闇

地味だが最も重厚な作者だと云える。夕花さんの母に対して、君子さんは父に心を傾ける。「父は一生笑えぬマンガばかり描く」もある。智子・夕花・君子の三人は年格好にもよるがライバル視されながら句境を進めて来たが、それぞれの自我の強さを私は感じ取って立派だと思っている。その証拠が数数の作品となって表れているのだ。

水粉千翁（倉敷市）

雲白く湧く恩讐の坂を越え

掬われてみたい金魚の疲れよう

頂上へ必らず登るおろかもよ

汚れなき空間にして芽が覗く

墓からの歩巾はなんとなく揃い

「川柳道場」を主宰し、山陽放送のテレビでも活躍する作者は指導力の上でも刮目するものがあるが、句の実力の伴っている強味は川柳塔の底力の一つと云える。句格が高い。

谷垣史好（松原市）

やわらかい風が吹く日の出来心

獍猛な兵士はいらぬ自衛隊

税金が戻る今年も冷夏かな

笠智衆も僕もうとうと秋日和

指の間を砂がこぼれてゆくのち

川村好郎氏が育てた三羽鳥に鬼遊・酔々・史好がいる。前二者は愛染帖への投句が滞り

がちで抄出する作品がないのは残念だが、この作者は社会批判や感覚句に現代的句いを盛り上げて。魅力がある。

小砂白汀（島根県）

ままごとの果てから女のひとり旅

なめくじの凍死を聞かず餓死聞かず

クモの巣を伝うて朝の虹まわる

老いならん砂に腹這うこと忘れ

常套語わたしの骨もガタがきた

昨秋、木次町の仲間と「わかあゆ」誌を発刊された意欲的な作者は、いかめしい袴をつけたロマンチストである。堂に入った句作りを後進にも叩き込んで欲しい。

西出一栄（大阪市）

女の香抜けてくすりの句う祖母

あじさいの着道楽にも似ておかし

秋逝くか芒いっせい老けにけり

病みつきし印象だけの古曆

春星の潤みもつ夜は人恋し

智子・君子お二人の近くに生まれたいこの老いたる女流川柳人は二人に大きな影響を与えられたに違いない。昨年二月二十四日にこの世を去られたが、晩年の境涯の句に牙えを見せ、前掲の第一、第三、第四をはじめ、「枯野道死ぬまわて歩むはかはなし」「未完のわれに喜寿たまわって恥かしい」など心情をありのままに吐露された。第五句の若さ、みずみずしさはどうだ。ご冥福を再びお祈りする。

遠山可住（兵庫県）

虹をほだいてセーターに編んでみる

虫の声宇宙の鼓動正確に

山茶花はひとり芸術家のように

折鶴になったら紙が呼吸する

秋へ向いて月はお化粧しはじめる

可住さんと云えば「勝手に動いとる正確な時計」の句のように感性は優れているものの批判句が得意だと思っていたのだが、感覚句にも多くの秀句を寄せられ視野の広さに敬服させられた。兵庫県川柳協会の要職にある。

高橋千万子（堺市）

病上り顔いたわって女笑む

化粧品値切らずいわしをば値切り

封筒の色に似合わぬきつい文

飲んできたなと耳もとでささやく蚊

はなやかな過去を包んで黒が好き

句会でも淡淡としておられるこの作者が私は好きで、人柄同様、軽みの句に深さがある。

堀江正朗（島根県）

酒うまし花見えぬとて花の下

妻の見た秋それだけが僕の秋

いい話いい人間になって聞き

自転車やすい秋の向うから

白杖でエイツと秋の空を斬る

大袈裟に云うようだが正朗・芳子夫妻は私にとって常に励まし力となってくれる。盲人に秋の原が見え、自転車のリズムが目明きよりも明確に近づくのが分る。

★

「愛染帖」投句先

千560豊中市中校塚三丁目13―15

桶高薫風宛（ハガキに三句以内）

第四回 全日本川柳大会

日時 昭和55年6月22日(日曜)

正午より

会場 岡山中央公民館

岡山市小橋町(岡山駅前から市電
東山行小橋下車旭川沿い)百米

宿題 第一部 事前投句 締切5月末日

- 「芸」 柴田 午朗選
- 「輪」 渡邊 蓮夫選
- 「山」 尼 緑之助選

2.5cm×21cmの句箋に単記無記名出句、封筒に住所姓号を明記して下さい。

第二部 大会当日出句 締切十三時

- 「時事雑詠」 大野 風柳選
- 「パン」 小松原爽介選
- 「流れ」 石原 伯峯選
- 「なさけ」 丸山弓削平選

表 彰 川柳大賞・大会賞

会 費 金一、〇〇〇円(発表誌呈)

第一部出句は会費と共に送付して下さい。
第二部は当日受付(但し第一部で会費送付の方は登録のみで会費不要)

投句先

556 大阪市浪速区大国町二一六一一

日本川柳協会川柳大会係あて

右川柳大会の前日(六月二十一日)に來岡される方には、地元柳友による誘導で倉敷市内観光(自由行動)吉備路史蹟めぐりのプランを用意してあります。別紙熟読下さい。

主催 日本川柳協会

★日本川柳人名鑑参加要領

一、名鑑原稿 所定の用紙に記入、姓雅号、本名、生年月日、職業、所属柳社、郵便番号、住所、電話番号、都道府県、自選句二句、顔写真(近影、できるだけ白黒の方がよろしい)写真および記載事項で掲載を望まれない個所は空白でも可

二、参加費 五、〇〇〇円 名鑑一冊送付、申込みと同時に払込み(ご送金は振替、または小為替が安全確実です)

三、締切り 昭和55年5月15日

四、発刊 昭和55年9月上旬予定

五、申込所 〒556 大阪市浪速区大国町二丁目六二の一

日本川柳協会事業部

電話(〇六)六四九一七三二

振替は口座番号(大阪三〇二九九九)

参加用紙はご請求下さいれば送付いたします

第12回東洋樹川柳賞贈呈

川柳大会

第十二回東洋樹川柳賞は、大阪川柳塔社の橋高薫風氏と決定しました。この栄誉を称え前途を激励祝福する意味で左の通り記念大会を開催致します。各層柳人多数のご参加を期待いたします。

日時 5月11日(日) 11時開場

会場 神戸市立福祉センター五階・婦人会館 神戸市西門区桶通三丁目(湊川神社西門前)

兼題

- 「粘る」 (当日発表)
- 「反骨」 平山繁夫選
- 「財産」 磯野いさむ選
- 「刃物」 新葉美野路選
- 「高い」 西尾 栞選
- 「薫る」 去來川 巨城選
- 「庶民」 大森 風来子選
- 「席」 小松原 爽介選

◇各題二句、欠席投句は受け付けず。

◇席題なし

講演 「私の川柳」 橋 高 薫 風

会費 千円(記念品呈)

備考 知事賞、市長賞ほか多数

賞 当日、昭和五十五年度・時の川柳社作家賞入賞者の表彰を行う。

主催 時の川柳社

後援 兵庫県・県教育委員会
神戸市・市教育委員会

句集「五色苑」

橋 高 薫 風

高知川柳社創立二十周年を記念して発刊になった五人の合同句集である。各人自選の二百句、計千句が収められている。「生活の記録、一人ひとりの歴史の集録」と主幹の川竹松風氏が序で述べておられる通り、永先芽十、慳谷桂緑、奴田原紅雨、川竹松風、瀬戸海洲の諸氏のそれぞれ個性が顕著な句集である。昭和五十五年三月一日発行
定価二千五百円

永先芽十

慳谷桂緑氏が「あとがき」で、この国の柳界にさわやかな刺戟をあたえてくれた大先輩で、この句集に同席していただいた光栄を言っておられる通り、大らかな詠みぶりに風格がにじみ出ている。日本川柳協会常任理事。

雨の野の人を尊く見る車窓
葉より秋はお酒がききそうな
鉄骨の火花都会に未来あり
雨しげしげに緋鯉にじんだ如く居る
移植ゴテ妻は仏の花を蒔く

慳谷桂緑

昭和三十九年川雑高知支部同人、ふうすと川柳社同人、高知川柳社副会長。感覚的に新鮮、一番大切な作品の調和を心得ておられる。家族や身辺を詠んで秀句が多い。

帯をとく娘の眼に額の裸婦の像
酔い給え君百年も生き難し
彼岸もち亡母のなじみの店で買う
花の雨噫ベトナムは鉄の雨
わが孫はたまごに目口おんなの子
奴田原紅雨

昭和三十九年川雑土佐支部同人、川柳文学社同人。五年間の従軍の経験から戦場での作品にも心をうたれる。繊細な心情の持主という事が掲載句から推測出来る。

禪を洗うに広い揚子江
亡き戦友の子からの便り銃磨く
母の名にひそめ給いし女の血
編針の速さは嫉妬かも知れず
しまい湯にあぐらをかいたいのちかな
川竹松風

昭和三十三年から川雑高知支部の編集発行人となり三十六年不朽洞会員、川雑高知と川雑土佐の合併を経て麻生路郎先生の死の直後、高知川柳社を創立、会長となる。川柳塔社参事。
飄逸洒脱なユーモアはその人柄を彷彿とさせる。酒好きの善人の像が浮彫りにされている。

百円の錠前頼り留守にする
飲むと飲まない欠点をけなし合
家でせむ笑顔をバーの隅で見せ
ホームラン盃持ったままで観る
タクシーに一人乗っても隅へかけ
瀬戸海洲

昭和三十六年川雑土佐の編集同人、四十年の創刊より高知編集同人。肺結核十年の闘病から直情そのものの激しい表現と、一方では友情を大切にしている心の触れ合いが魅力である。

癒える日の約束増えて未だ癒えず
空白にあらず闘病十年史
楽しくも日程狂う友が来て
はつきりと断る気性悪意なし
やがて来る哀しき老のモノローグ

津山川柳大会

55年度津山市芸術祭

時 6月1日(日) 10・30分開場
所 美術教育会館大ホール
津山市大手町5-1-3(駅より徒歩で5分)

会費 千円(記念品・発表誌呈)
兼題と選者(各題二句)

「背」 天根夢草選 「雨」 橋高薫風選
「風船」 住田三鈴選 「ヒロイン」 大森慶幸選
「ふれあい」 藤川良子選 「そして」 北川柳一郎選
「切る」 海地大破選 「夫婦」 泉 淳夫選
「想い」 前田美巳代選 「種」 定金冬二選
△12時30分締切▽
席題なし、欠席投句辞退
主催 津山市教育委員会

「無財の七施」

と川柳

H・F生

衣食住に必要な一切のものは、すべて数多くの人々の努力と、天地自然の恵みによって作られるが、お金さえ出せば物がすぐ手に入る現在では、そのありがたみを感じる人は少く、特に終戦時の物のなかつた悲惨さを知らない若者の中には一杯のご飯にさえも農民の汗の滲んでいることなど全然意識しない。本当に悲しいことである。この豊かな物に囲まれた有難さが、逆に心貧しい人間を作っているようである。

自分さえ良ければよい。涙は、自分の為に流すことはあっても、他人の喜び悲しみに対し、分かちあう涙を持ちあわす人は大変少くなっている。

先日読んだ本で「雑宝蔵経」と云うお経の中に「無財の七施」と云う教えのあることを知った。それは財貨を施さなくとも、心掛けにより、人から喜ばれ、感謝されるといふ七つの行いを示したものである。即ち、思いやりのこもった眼で、顔で、言葉で、相手に接して、相手を喜ばせ人生に希望を持たせるようにする。また困っている人には、骨惜しみをせず

うである。
このような行いを、お互いに施しあえば、ゆたかな人間関係がつかわれて、うるおいのある住みよい社会が作られるものと思う。またこれを行える人が一番幸せで、充実した人生とゆうべきではないだろうか。

こんなよい月をひとりで見えて寝る
放 哉
神戸、須磨寺境内の大師堂の前にこの句碑が立っている。
これは俳人尾崎放哉の名句の一つである。放哉は東大法科を卒業後、保険会社に勤め、やがて重役の椅子が約束されようとする出世を前にして、彼は嘘と非人情の世の中にあいそをつかし、無一物無

一分間の柳論

松本忠三

悪意な女流作家の句集を手に入れているし、彼女の多くの作品にも接しているが、どうみても小生の頭脳では理解しにくい。それは下五の点にある。どうして上五から中七が生れたか、それとも下から上が浮かびあがったのであろうかである。何とか繋ぎ合わせてみて一本にならぬ。或時失礼をまかえりみずたずねてみた。彼女曰く「ひらめきです」と「瞬間的に輝いたものを上五に結ぶんです」とつけ加えた。蓋し名言とも思えなれど成程すらすらと読むと美しさを感じさせられるが、どうも納得がいかなぬ。この話を我が柳社の師匠にした。「ひらめき」とはうまいことを言ったものですね。然し瞬間的に輝いたものには消え失せることも早いのではないですか。やはり何時までも心にこるものが欲しいです。との答であった。仲々むずかしいものであるしかしこの種の句が出回っていることも確かであり、理解者も多いようである。自分の勉強不足を恥ともおぼす。ただわからないのは、「ひらめき」を第三者がどう理解したかにもある。

尽蔵の境地を俳句に生きた。そして彼は寺男で終った。重役より寺男としての人生がより充実したものであると彼は悟ったからであろう。この句に喜びを分かちあう「無財の七施」の心が息づいているように思われる。
川柳は「人間陶冶の詩」と云われる以上、句を作ると同時に、いや作句以前に人間形成として「無財の七施」を心掛ける必要があるのではあるまいか。それがひいては「生命ある句」を生む道につながるのではないだろうかと考えている此頃である。
――編集部から――原稿には住所と筆名をお書きください。



昭和49年12月2日句碑建立の日の摩天郎氏

八木摩天郎氏急逝

弔辞

西尾 葉

人生朝露の如しという言葉がございますが、唯今御霊前に佇つて、つくづくその言葉をかみしめています。

早稲田大学法科を御卒業後、堺市役所に御奉職になり、その後大阪府庁に勤められ、その傍ら趣味として川柳をよくされ、川柳雑誌時代、麻生路郎先生の句集「旅人」の編集に又麻生霞乃先生の句集「福寿草」の編集に、裏方として一段のご努力をされました事は我々の今尚深く感銘しているところでございます。

又堺川柳会の会長として、毎月このお部屋で句会を開催し、後進を導かれ、富田林の富柳会の育ての親として門下の方々に慈父のよう慕われておられました。

昭和四十九年十二月二日全国川柳家一同の協賛の元に、堺市大仙町の仁徳陵広場に、

ふるさとは大仙陵のあるところ

という句碑を建立されて川柳家としての一家を成されました。

今日貴方がお歿く成りになつても、その名

句は永遠に輝やくことでございましょう。

又貴方の有名な句に

公書を吐くと仁徳のたまわず

という名吟がございます。私達はこの名吟と共に、好作家の貴方を思い出すことでございましょう。

貴方は堺、切つての名家にお生れになり、あの古典的な御風貌と隆々とした鼻梁と、やさしい眼な尻と剛毅果敢な御性格を川柳で陶治された御風格を尊敬して、私達は折にふれ時に感じてお惚び申上げることでございますよう。

貴方が残された川柳の御行蹟に對してまだまだ申上げたいことは沢山ございますが、之にてお別れ申上げます。

何卒心安らかに眠り下さいませ。謹んで御冥福をお祈り申上げます。

昭和五十五年四月四日

川柳塔社同人代表

副主幹 西尾 葉

謹んで川柳塔社参事会々長故八木摩天郎さんの御霊にお別れの言葉を申し上げます。桜の蕾のまだ固い今日、こんなにも早く貴方とお別れするとは夢にも思っておりませんでした。三月七日の本社句会に又三月二十三日の天笑君、つき子さんの記念句会に、久しぶりに元気なお姿を見せられて、閉会の辞を述べられました。まだその日より一カ月と経たないのにこの度突然の訃報に接し、唯々愕らく許りでございます。

堺の名物男

不二田一三夫

摩太郎氏の学生時代は、間貫一のような美男子だった、そうな。(記者註・間貫一とは金色夜叉の伊井蓉峰(明治4・8・16)昭和7・8・15)のことだろう。伊井蓉峰は新派の俳優で、西の中村鷹治郎(先代)とならび称された代表的美男子であった。

摩太郎氏は大地主で、堺市のここあそこに

田中狂二氏逝く

不二田一三夫

故摩太郎氏は4月2日に急逝、翌3日自宅でお通夜をいとなまれた。その席上で藤井一二三氏から、摩太郎氏が一二三氏に出されたハガキを見せてもらった。

土地があって、その土地を借りている人たちが、少しも土地代の値上げをしないので、「こんな時代にいつまでも安くお借りしているのは心づらいので、土地代の値上げをしてください」と、摩太郎氏に対し、風変わりな嘆願的一幕があったそうである。「そんなことは心配せんでもよい。商売に励みなさい」と、今日の時代にはウソのような佳話もある。

摩太郎氏はたしか今年76歳である。堺の郷土史家(菊沢小松園氏談)でもあり、著書も多い。NHKや各新聞社が堺市取材する時は、いつも摩太郎氏がそのインタビューに答えておられた。

氏の雅号は路郎先生が名づけ親だそう。路郎先生と飲み歩いているとき、先生に雅号をつけてほしいと頼んだところ、ちようと堺宿院のカフェー・カザリン摩天楼の前だったので、

「摩太郎にしとけ、わしの郎を一字やる」
昭和六年の二月だったそうである。氏的身

堺川柳会の句報へ載せる原稿らしかったが、使用後は川柳塔の「柳界展望」へ出してほしいと、亡くなられる二時間ほど前に一二三氏に云われたそうである。

そのハガキで驚いたのは、堺市の同人、田中狂二氏(堺市今池町二丁二の一四)が3月25日に死去されていることである。どこからも連絡がなかったので、すぐご遺族へおくやみの通信の中でおわび申し上げておいたが、

長は若い頃一九〇〇ぐらいあったのではないかとおもう。

「川雑」へ編集部入りするまでは、氏がよく不朽洞(路郎邸)へ出入りしておられたようだが、はくがそのお株を奪ってしまったかたちになってしまった。しかし、句集は全部、氏が手伝われたことである。

氏の追悼文は堺の人にお願ひしたかったが(小松園氏には頼みしておいた)締切までにまにあわなかった。

故八木摩太郎氏の

ご遺族から

金一封

川柳塔社の発展費としていただきました。

川柳塔社

5月号の最終締切の今日4月7日までに資料がそろわなかった。

田中狂二氏は不朽洞会会員で「川柳雑誌」時代には句会でよくお目にかかったが、川柳塔)になってからは句会へお見えにならなかつたように思う。すこし度のかかった目鏡と、顔艶のよいお顔を思い出しているが、写真もない。いずれどなたかに、氏の面影を書いていただくつもりである。

快 適

柴田英壬子選

快適なドライブアなのに割り込まれ
 楽ちん楽ちん今宵も宵寝してしもて
 快適なコースを組んだツアーリスト
 新築の木の香快適日々好き
 快適な旅を母さんすまなかり
 快適な音でマナイタ菜をきざみ
 快適な寝心地らしい子のいびき
 快適な涙で受ける新人賞
 先頭で行く日曜の山が晴れ
 快適な暮しが慣れて風邪をひき
 快適は孫が背中をかいてくれ
 快適という建売りが崖の下
 快適なりズムハンドル持つて寝る
 働いた汗さっぱりと流す風呂
 快適に揺れて居眠り乗り過し
 上潮の香も快適な大漁旗
 快適にロマンを乗せてボート漕ぐ
 ボケットに金あり空は五月晴れ
 快適に過せた今日の日記書く

快適な目覚めに今日の意欲湧く
 口笛を吹いて若葉の散歩道
 快適な旅グリーン車に背を預け
 快適な酒量無口がしやべり出し
 風も陽も快適孫の床織り
 快適な幕しのレール日々磨く
 辛抱の掌に快適な今日がある
 快適に飛ばすとバトカー追つて来る
 心地よい日溜り仕事を忘れさせ
 水すまし快適らしく輪がもつれ
 エンジンも快適新車の乗り心地
 快適なりズムに乗ってベタル踏む
 春風を背中に軽く踏むベタル
 快適な一日終えた家の風呂
 快適な老後を信ずる朝の靴
 完走をはたして飲んだ生ビール
 子の好意受けて快適空の旅
 関白宣言を歌う新妻は快適
 快適な勤め一家の呼吸合い
 快適な勉強部屋からモヤシッ子
 快適な朝の鏡はすき通る
 快適な寝息を持った豚の鼻
 一山を踏えて四方の峰望む
 快適な暮しをローンで支える
 快適な船足緑の島を縫い
 快適な散歩上着は妻が持ち
 快適な眠りを予約蒲団干す

満津子
 同
 洛 醉
 隆 子
 ゆう也
 弘 朗
 右 近
 なり子
 宵 明
 悠 泉
 千 子
 勝 美
 ふ み
 弘
 一 進
 軒 太 楼
 テルミ
 秀 峰
 花 子
 みどり
 可 住
 捷 一
 素身郎
 右 近
 代 仕 男
 四 郎

快適な旅しみじみと荷をほどく天彦
 人
 蕎麦殻の枕で老母のよい寝顔 カズエ
 男子出産快適な朝となる 道子
 天
 快適な巡りを人間が居てこわす 可住
 軸
 快適なパンダのハウス羨まし

珍 重

北山越山選

珍重な儀式アイヌの里で見る 登美也
 応接間に初代の額の八字髭 優
 一代を珍重がられて紙をすく 寿美
 孫の来る日珍重の壺仕舞う 素身郎
 珍重な皿に値上げの客が付 木魚
 成金は値段できめる珍重品 大鷹
 珍重にあつかう茶器の錆の肌 越子
 珍重な酒は匂いかすがすだけ 洋々
 性転換そんな女へ客が寄り 代仕男
 絵屏風の珍重古代の色に映え 本蔭棒
 珍重の果ては維持費に洩らす愚痴 里風
 録音テープ珍重亡母の笑い顔

吟 題 課

女の児秘蔵の貝に夢を詰め 胡顔子
 乱獲が過ぎ珍重な兜蟹 朴竜
 珍重な味を秘伝に老舗売り 裕
 虎ライオンパンダが氣に入らず どんたく
 花の香も知らぬ珍重される壺 みどり
 代々の珍重土蔵で欠伸する 秋月
 百五つ珍重されて知事が来る 天彦
 珍重な古文書があつた襖紙 峰雪
 骨董屋珍重の罨へレール敷く ゆう也
 年一度陽の目をみせる蒔絵壺 軒太楼
 受付で珍重される口上手 可保留
 数の子を戴く箸は正座する 白季
 石ころが珍重されている平和 可住
 世話好きで珍重がられ楽隠居 彩平
 蓄音機ラッパが錆びている値打 宵明
 珍重な茶碗を褒めてお茶の席 綾女
 珍重なときの生態追うカメラ 愁泉
 十年目に見せる秘仏を智恩院 規不風
 珍重に答えた籠が鳴いて呉れ 文平

住

人

地

桐箱に家系を語るお墨つき カズエ
 珍重の訳に乙姫さまがいる 古方
 へその緒とお守り母にまだ会えず 軸

風習が風化民話も錆びてくる 洋々
 風習を大事に故郷に生きつづけ 雀声
 風習も変り人情も変り 春日
 流し雑鄙びた風習生きつづけ 多賀子
 ご時世の波に風習揺すぶられ 木魚
 婚礼の荷物風習積んで着き カズエ
 風習に合せる嫁でつゝがなく みどり
 風習を捨つるに便利大都会 隆子
 風習を打破して持った新世帯 勝一
 しきたりを守って里のまつりごと 裕
 餅撒きに赤い頬つべの走る野良 洛醉
 風習は僕等で作る新世帯 どんたく
 さなぶりの風習田植機に喰われ 朴竜
 女人禁制昔語りの山となる 実
 風習も村も沈んだタムの底 久仁於
 風習が奇抜でテレビに掘り出され 掬治

風 習

弘 津 柳 慶 選

宵越しの金は持たない江戸氣質 虹汀
 風習を破って二人の城固め ゆう也
 風習が弱い女にしてしまふ 文平
 風習を忘れた街の販売機 無人
 風習と見得とで無理する鯉のぼり 花子
 風習へまた思案する奉加帳 可保留
 過疎の村風習だけが息づいて 寿美
 風習も時の流れに逆らえず 軒太楼
 どやどやへ高校生を借りてくる 勝美
 風習をふまえて芸を磨き上げ 静枝
 風習の違う村から嫁が着き 宵明
 風習がうすれて淋しい京の街 御前
 風習にめでたく決めた大安日 彩平
 風習を売り物にしてアイヌ生き 規不風
 風習を守る 旧家のお正月 綾女
 古き良き風習残す旧家の灯 越子
 風習に馴染も薄く社宅に居 代仕男
 町内にならわしのある祭寄附 弘朗
 風習がにつころがしに残る味 天彦
 青い目の愛が風習のりきらせ 御前

人
 先人の知恵風習に生きている 素身郎
 地
 草餅に風習があり母の味 里風
 天
 風習が季節季節にある故郷 悠泉
 軸
 風習を重んじ屠蘇の膳に着き

初歩教室

題 — 神妙 —

本田恵二郎

— はつきりとつかめぬままに観るピカソ —
私の住む倉敷市には大原美術館が在って、ピカソもマチスも其他もろもろの名画の实物が展覧されている。知人を案内して、年に二三度は私も鑑賞しているが、その真髄も真価もつかめないままで鑑賞している。その感じ方は人それぞれに千差万別であろうが、ピカソの实物を観たという事実は思い出の片隅に残っている。ピカソまがいの絵に出会った場合は、真似てるなどという感が先に立ってしまった、そして感動も湧かぬばかりか、印象にも残らず、其の日の中に忘却の彼方に消え去ってしまう。それに似たような感じを受ける句に出会うこともある。

神さまのお告げ神妙にうたがわす
(神妙に神のお告げへかしこまり)
神妙に親父の意見に頭さげ
(神妙に親父の説に負けておき)
神妙に孫は両手をついて詫び)

登舟
峰雪
智津子

(神妙に詫げる孫の手可愛いすぎ)
神妙な顔に事件がありそうだ
(神妙な笑顔の裏に翳よぎる)
当選に達磨へ筆の神妙さ

(当選の筆神妙に目を入れる)
神妙な顔でうなずく聞き上手
(神妙な顔で聞き耳立ててやり)

欲しくても神妙にたえる食療法
(神妙に耐えねばならぬ食療法)
神妙な誓詞震えて夫婦の儀

(誓詞読む神妙な声ふと震え)
神妙に坐る二人に決が出す
(神妙な対座へ決論見つからず)

神妙に野良犬しっぽ振ってくる
(野良犬の神妙あわれ尻尾振る)
企みがあつて叱言も神妙に

(神妙にお小言を聞く下心)
神妙に得度を受ける豆和尚
ガン検へ胃カメラを呑む神妙さ

(神妙に呑む胃カメラにある不安)
それが神妙に聞いている顔かいな
理屈には勝てず神妙に引下り

(理屈には勝てず神妙に兜脱ぎ)
ともかくも仲人の顔を立てて神妙
(神妙に仲人の顔立てておき)

神妙な一面見せているお見合い
(神妙な一面見せ合う見合席)
神妙な視線へ紅茶冷めている

神妙になれぬ男が持つ自説
(神妙になれぬ男の自己主張)
一片の神妙も知らぬ一言居士

房子

三千代

芳枝

伊都

なみ

茂美

武太

同

胡頼子

同

利美

同

保夫

同

小雅子

同

神妙な顔で繰り言聞いてあげ
神妙に社訓を聞いてる新社員
(神妙に社訓聞いてる新入社)

神妙に社長訓辞を聞き流す
神妙に誓う二人は神妙に
(神妙な顔で神前に誓い合い)

神妙な応対年期がものを言い
二日酔神妙に妻の言を聞き
(妻の愚痴神妙に聞く二日酔)

神妙に話聞く気も足が異議
(神妙に聞く気へ足がゴネはじめ)
神妙に聞く顔心空を翔び

(神妙に聞いている心は翔んでいる)
神妙にかわして誓詞にしばられて
神妙にして逃げ道を考える

(神妙な顔で逃げ道考える)
入学の顔みな神妙手ひさの上
(神妙な顔が揃った入学式)

罪意識ない顔神妙さ忘れ果て
(神妙さも罪の意識も忘れ果て)
神妙に押す実印にある不満

(神妙に実印押さねばならぬ破目)
神妙な顔から嘘がばれている
(神妙な顔をするがばれたい)

招福の護符へ神妙な顔並ぶ
神妙に易者に聞いている妙齡
(神妙に易者の言葉聞く妙齡)

神妙にしてはいる酒は三日だけ
神妙に蓄は春を待つてます
(神妙な貌で芽を吹くチャンス待ち)

こつびどい神妙顔した売国奴

英子

美佐

同

三男

同

千子

同

未知

同

八文銭

同

幸代

同

武水

同

紀久子

同

句味地

(神妙な仮面かぶつて国を売り)
神妙を顔してボスの腹黒い
(腹黒さ神妙面でかくすボス)
神妙に坐る振袖見染められ
すなおさが取柄の孫に夢をかけ
(神妙が取柄の孫よ翔べよ翔べ)
神妙な膝に拳の手が固い
紅葉の手の神妙さに負け笑い顔
(神妙なもみじのお手々に負けました)
神妙は笑顔の裏で舌を出し
神妙に苦言を聞いているポーズ
(神妙な顔で苦言を聞き流し)
反省の瞳が語る神妙に
(神妙に反省している瞳がきれい)
もらしたか孫が急に神妙に

同 貞子
同 静佳
同 誠一
同 佐代子
同

(孫急に神妙サテはもらしたか)
神妙に漫画読んでる大人たち
企みを秘め神妙な面かぶる
(神妙な仮面の裏で策を練る)
神妙な警察犬の面構え
神妙はあととほけろりとその場だけ
(その場だけ神妙な顔作り上げ)
神妙な顔で心に叛旗掲ぐ
神妙に聞いて自説をゆずらない
(一応は神妙に聞き説まげず)
神妙にボックリ寺で聞く法話
泣いたあととけなげなほどに神妙さ
神妙に初心にかえる配置替え
虚しさへ神妙になる木偶人形
神妙に受けよう恩師の鞭なれば

幸 同 勝美
同 露枝
同 三和
同 公乃
同 寿子

神妙な顔が揃った一周忌
神妙な園児にお伽の国がある
神妙な態度ご心証和らげる
神妙にお縛につかれぬ大物達
神妙に犬の初恋児が告げる
悪童の神妙面は疑われ
神妙な顔が似合わぬお人柄
神妙な伏目造反の機を狙い
神妙な顔でまたかの小言聞く
神妙な顔で泣きごと聞いてやり

可保留 可保留
瓢太 静枝
同 柳五郎
同 慶彦

題「馴染」5月20日締切(7月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四
〒七一― 本田恵二朗

身よりのなき老婆いくさのことにふれ (布堂)

森田布堂 句碑建立 川柳大会

還歴祝賀

日時 昭和五十五年五月二十五日午前十時

(句碑除幕式は前日仏式にて執行)

会場 赤碓町中村喜国山長伝寺本堂

兼題 「頭」「難題」「世間」「筆」「意地」「意見」

席題 「一題当日発表」

兼席題共三句以内 投句締切正午

欠席投句は「遠慮下さい」

会費

三〇〇〇円
記念品、懇親会、会報含む

◎当日の送迎は会員が赤碓駅でお待ちして
います。自家用車の出席はお控下さい。

主催 赤碓川柳会
後援 赤碓町文化協会
鳥取県川柳作家協会

▼川柳研究社創立50周年記念川柳大会が7月
20日(日)10時から日本教育会館8階大会議
室で開催・会費二千円(川柳研究合同句集・
昼食呈)・題と選者/選手・正敏/竜・吟一/
検査・黙朗/旧友・圭佑/午後・哲郎/柔軟
・民郎/習慣・茶六/年輪・蓮夫/ (投句挿
辞)懇親宴三千円・東京都府中市新町2―147
―26・川柳研究社

川柳塔柳箋

一冊・二百円(60枚綴り)

送料二百円

▼第31回新潟県川柳大会7月6日(日)10時

―17時・会場は同市南方代町一―八新潟厚生
年金会館・会費千円・題と選者/指揮者・正
敏/背中・寿/ひとり旅・茶仏/署名・鮮紅
/ふくらむ・紫乃/流れる・比呂夢/雑詠・
大野風柳/各題二句・講演・寺尾俊平・席題
3題・欠席・投句五百円・締切6月10日
〒956新津市大鹿六一三・柳都川柳社

大萬川柳

「肩」

入選発表

選者 川村好郎

投句総数 四百十四句

入選 五十一句

大 阪 清 女

叩かれる覚悟の肩で今日も出る

大 阪 小松園

肩の出た服で東京から戻り

鳥 取 静 泉

双肩の荷をバトンする子もいない

堺 ひろ子

肩で息 ローンが背を押してくる

東 大 阪 美 子

肩の手をもうこばまない伸となり

羽 曳 野 吐 来

応諾の肩が震えたプロポーズ

和 歌 山 誠 一

肩巾を越えた風も吹く浮世

寝 屋 川 あいき

肩のこり今日は夫がはくす番

和 歌 山 和 子

北風に挑む男のいかり肩

藤 井 寺 与 呂 志

肩張った女の意地を捨てそこね

八 尾 夕 花

嫁がせて軽くさびしい母の肩

松 原 久 子

アンマ機があるのに私の手に甘え

和 歌 山 三 男

翔んで翔んで羽を休める母の肩

今 治 宵 明

定年の影絵の肩が瘦せている

米 子 雄 々

頼もしい肩巾ふりむいてはくれず

大 阪 蘭

負け犬の肩いからせてる繩のれん

和 歌 山 幸 代

傘の中肩ふれ合うただけの縁

倉 吉 弘 朗

肩叩きされると脆い小役人

和 歌 山 頼 次

喜寿の父うしろの肩が淋しそう

寝 屋 川 晴 風

薄給の肩へめり込む値上げ巾

和 歌 山 寿 子

逆風を貫く肩に愛の鞭

高官を守る偽証の肩を張り

大 阪 道 子

重たかる皆んな乗ってる父の肩

大 阪 なりこ

肩替りして今日からは嫁の味

大 阪 満 津 子

再会へ肩抱き合うてたしめ

大 阪 さくみ

肩叩きされて身に沁む宮仕え

名 古 屋 枯 梢

再会の嗚咽は肩で受け止める

倉 敷 里 風

頑張れと肩を叩いてくれただけ

笠 岡 忠 三

肩すかし食らう女の変化球

今 治 胡 頼 子

内心は子期をしていた肩叩き

岡 山 七 面 山

人生のたそがれと知る肩たたき

大 阪 柳 宏 子

肩を抱く二人の影を消す夜霧

奈 良 本 蔭 棒

情熱の寄り添う肩へ春の雪

八 尾 美 幸

肩の荷をおろさぬ父の破れ靴

大 阪 弘 生

肩並べ歩こう長い夫婦坂

倉 敷 春 日

夕焼の好きな女の細い肩

堺 一二三

肩巾の広さにおんなを賭けてみる

大 阪 一 二 三

肩車の子へ明日の夢を賭け

抱きあって励ます肩も泣いている

名 古 屋 度

広い肩妻子ぐっすり眠らせる

米 子 美 世

肩書を添えて体よく左遷され

和 歌 山 英 子

窓際へ辛辣にくる肩たたき

米 子 美 佐

いからした肩に虚勢がすんでいる

大 阪 弘 生

肩車山の向うを子に見せる

人 ノ 句

肩の荷の重みが生甲斐感じさせ

和 歌 山 頼 次

地ノ句

名 古 屋 枯 梢

肩車父の背中には伸びていた

天 ノ 句

平和とは肩でとまった花びらか

倉 敷 方 大

昭和五十五年度

八和子	五〇	和歌山	九右近	五〇	守口
七方大	五〇	倉敷	花梢	五〇	富田林
六道子	五〇	大阪	一〇	五〇	「本気」三句以内
五百酒	五〇	西宮	一〇	五〇	締切 五月二十五日
四寿子	五〇	和歌山	一〇	五〇	第七回
三一二三	六〇	堺	一〇	五〇	「やりくり」三句以内
二武雄	六〇	和歌山	一〇	五〇	締切 六月二十五日
一弘生	七〇	大阪	一〇	五〇	以下略
ベステン	(三月現在)		九右近	五〇	投句先

千592 堺市堀上緑町一―三―七
藤井二三三方 大萬川柳係

おわび

過日開催致しました大萬川柳大会の作品集のうち薫風氏選「激励」の地の句が私の不注意により誤載されました。ここに訂正させていただきます。

激励の母の笑顔よバラの窓 越子
選者並に越子さん、又皆さんに深くおわび申し上げます。
(好郎)

今後ともよろしく。

川柳塔社常任理事会 (4月3日)

主幹がお疲れから欠席された。栗副主幹を中心に議題が進められていく。昨二日ひる、八木摩太郎氏が急逝され、今日お通夜、明日告別式。

五月の句会を摩太郎氏の追悼句会にする。とを一三夫から報告、全員OK。

5月25日、森田布堂氏の句碑建立記念句会に本社から選者を二名要請されてきたので菊沢小松園副理事長と阿萬萬の常任理事が出席することになった。

新同人紹介

桑田静子

生々庵・好郎・推薦

昭和五十五年度第六回

「本気」三句以内
締切 五月二十五日
第七回
「やりくり」三句以内
締切 六月二十五日
以下略
投句先
千592 堺市堀上緑町一―三―七
藤井二三三方 大萬川柳係

5月11日は薫風氏の東洋樹賞受賞、同18日は某氏の句碑除幕と、おめでたが重なる。出席―水客・紫香・潮花・梨・形水・与呂志・岳人・薫風・小松園・一三夫―敬称略。

★直原玉青圃伯は洲本市制四十周年を記念して、このほど一茶・大雅・閑雪・鉄斎などの作品百二十点を市へ寄贈された。金額にして数億円とのことである。

▼30集、吉備団子 が川柳ますますかつから発行。海外から9名、合計四四〇名という盛況。川柳塔関係の参加も多い。(定価・千円・送料三七円・発行所701・42)

岡山県邑久郡邑久町山手一四四五・川柳岡山社

▼故小浜牧人二周年句会が4月14日西宮中央公民館会議室で開催。若本多久志副理事長が兼題「雲」の選者として出席された。

▼川柳京かがみ第12号に川柳塔同人

のユーモア句集として20氏の作品が紹介されている。発行所 千605京都市東山区繩手通新橋上ル伊藤入仙方―川柳京かがみの会

▼高知川柳社創立二十周年記念川柳大会へ出席の薫風氏から電話がはいる(4月8日夜)はくの勝を一度聞きたいと、川竹松風氏が選抜で優勝した高知商業のご機嫌のよい声も送ってくださった。

この稿、編集最終の日ですべり込む。(一三夫) ▼青森県川柳句集が昭和五十五年三月二十日青森県川柳社(代表・中林瞭象)から発行になった。昭和五十三年に創立三十周年を迎えた記念事業の一つとして計画されたもので、参加者二百三十名を越えたA5版二百五十頁の集大成である。(非売品)

▼第10回紋太忌・ふあうすと年間賞発表川柳大会へ川柳塔関係から橘高薫風(選者)櫻谷寿馬、藤村メ女、高杉鬼遊諸氏が出席。百五十余名の盛会だった。

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

▼中島生々庵主幹は公私多忙のため、お疲かれが出て四月の常任理事会にも欠席された。

▼森中恵美子さんの句集「水たまり」発刊記念が3月30日、新大阪チサンホテルで開催されたが三百六十余名出席という盛会だった。

▼序文岸本吟一氏、跋に定金珠玉の句八〇。三窓氏の卓抜の編集など話題が多い。定価二千円(A5判・二五〇ページ)発行所〒560石川市赤阪一丁目六一九〇豊中市・番傘人間屋。

▼保木寿句集「風声(ふうしやう)」発刊記念句会/日時/6月29日(日)午後1時/会場/京都市中京区壬生東洞田町(四条御前)京都労働者総合会館4F

▼一部/開会あいさつ・祝辞・謝辞/句集「風声」鑑賞/西村芳川氏

▼二部/席題住田英比右選

▼宿題「飾る」伊藤好江選「釘」高杉鬼遊選「帯」田頭良子選「悪女」玉野可川人選「風」森中恵美子選「声」歌藤一麦選/出句各題3句締切/午後2時/会費・二千円◎ご出席の方に句集「風声」とおみやげ呈/主催・京都番傘川柳会

▼第25回全国川柳作家年鑑参加作品公募・参加費二五〇〇円。規定は例年どおり締切・55年7月末日。詳細は〒673明石市松が丘一丁目二六一一八一正谷柳節使あて。

▼全国鉄川柳人連盟第24回和倉大会が6月28日・29日七尾市和倉温泉白崎シーサイドホテルで開催。同会長岡川洋々氏(本社同人)のあいさつから始まる。

▽同人の動向△
▼西尾菜氏(八尾市)は5月18日の句碑建立の多忙の中を日川協常任理事として東京の常任理事と運営の相談に走るなど精力的に活動されている。

▼川村好郎氏(高石市)から、どんぐり川柳会15周年記念吟行(京都南溪園・3月16日)の寄せ書拝受。

▼高知川柳社創立20周年記念川柳大会の寄せ書拝受。

主幹川竹松風氏ほか。
▼森田布堂氏(鳥取県)の句碑建立が5月25日におこなわれるが、氏の要請で本社から菊沢小松園氏と阿萬萬の氏が選者として出席する。

▼河内天笑氏と野坂つき子さんの結婚記念句会が3月23日堺東の。やまたけレストランで開催。葉・薰風氏ほか本社同人や他社の方方の出席六十余名の盛会だった。(寄せ書拝受)

▼直原七面山氏(岡山県)の第六句碑が55年2月7日に久米南町役場(中央公民館前に建立。雲に鳥芭蕉は人を近づけず。第七句碑が2月12日に岡山県立津山技術訓練センター)の校庭に建立。太陽に向って庭のみな手を広げ。目下第八句碑進行中。

▼岡村久志良氏夫人から「わずかながら快方に向っていますが、老人の身が半身不自由ですのてなかなかすぐに全快とはまいりません。しかし本人は再起を期して頑張っております。

▼「我楽苦多」(水客・紫香・潮花三氏の句文集)も40号を迎えた。今回は「偲ぶ」という別冊(紫香氏が

妻よ」と題して愛妻をしのぶ一文がある。今年は33回忌だろう。水客、潮花両氏の友情執筆も美しい。
▼小林由多香氏(鳥取市)から十二指腸潰瘍で2月3日入院。3月30日の県大会の実行委員長の大役があり全快へ頑張っています。
▼清水一保氏(鳥取県)から「不慮の事故で昨年は中止になりましたが本年は7月ごろ大会をもちたいと思っています。

▼第6回「歴史の散歩道」川柳吟行が3月23日に催されたが、木村兼霞堂邸跡史蹟の説明立て札は中川滋雀氏の筆である。

▼八木摩太郎氏(堺市)が、4月2日心筋梗塞で急逝された。(P48参照)3日お通夜。葉・小松園氏はか同人多数おこやみを申しあげ翌4日自宅で盛大に告別式が行なわれた。(P48参照)

▼田中狂二氏(堺市)が3月25日(死去。翌26日自宅で告別式があったことを、摩太郎氏が藤井一二三氏へ連絡されたハガキを見て始めて狂二氏の訃報を知った。合掌。

▼前号訂正「4月号。水煙抄、秀句鑑賞」の、冬木立

春を信じるたしかな芽」の
潮作者は白石潔氏。

▼5月の句会△
▼菜の花句会は10日(土)六時から西郷会館・近鉄大阪線八尾下車すぐ。題と選者/女心・葉/朝・酔々/指図・美幸/引く/未定/席題二題・兼席三句以内、投句は郵券百円。締切前日まで。投句先・八尾市高安町北二丁目二五・大路美幸宛

▼南海電鉄川柳会は15日六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は/念仏/不馴/疍の題は

▼南大阪川柳会は20日六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は/平葉/レレ/晩年/蛙。

▼東大阪川柳同好会は24日(土)六時から東大阪市民会館2Fで開催(近鉄永和駅南)スグ・題は/独立/裏表/妥協/だしぬけ/席題二題当日発表。

▼11日―東洋樹賞贈呈

▼18日―西尾菜句碑除幕

▼25日―森田布堂句碑除幕

▼25日―森田布堂句碑除幕

本社 四月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

桜に足を奪われたか、やや出足がにぶい。しかし元氣になられた若本多久志氏のご出席は会場を明るくする。早く傍島静馬氏をお迎えしたいものである。

まずこの二日に急逝された八木摩天郎氏のご冥福を祈り一分間の黙禱から四月句会の幕が開く。

三月三十日に発刊された句集「水たまり」の著者森中恵美子さんがわざわざお札に来てくださった。当日、川柳塔社系から五十余名出席したそうである。

柳話の栗氏は、最近よく講演を聞きに行かれるとのことである。「すこしでも柳話の勉強をしたいので」だそうである。

「テレビで云うたる」と脅迫じみた言動から一時おろされていた西条凡児のセスチュアールなどもとり入れ、または大阪府公民館運営

審議委員会総会へまで足を運び、安岡電太郎氏の話まで聞きに行かれた。

故徳川夢声氏は話術の天才で、その間のとり方は絶品であるとされている。生駒雷遊と東都映画解説界を二分した夢声の話術はたしかに天才であろう。

夢声は津和野の出身で、津和野川の橋の袂に彼の句碑がある。

—さざんかの雨となりたる別れかな 夢声
夢声は俳句もうまかった。父は警官、母は看護婦だったそうである。夢声一家は一と旗挙げるため上京、夢声の母は同郷の一大学生と恋におち蒸発した。その後、大学生と別れ一人になった母と夢声が会う一幕がある。

ここから話が飛んで江戸中期の俳諧師、炭大祇や、慶紀逸が登場するが、スペースの都合で割愛させていただく。

今月の月間賞杯は新鋭小雅子氏に輝いた。来月は「八木摩天郎追悼句会」となる。故人のためにも一人でも多くご出席いただきたいと思う。三月句会に出席された故摩天郎氏のお姿をもう一度まぶたに描いてください。

(受付) 与呂志・修史・岳人
(進行) 柳宏子・記録・鬼遊

出席—勝美・岳人・古方・雅風・修史・与呂志・多久志・滋雀・瓢太・右近・一三夫・綾女・水客・紫香・潮花・太茂津・きみ・英

子・千万子・萬的・規不風・桐下・蘭・英子・没食子・薰風・憲祐・天笑・文秋・小雅子・善紫・弥生・柳伸・翠光・雀踊子・柳宏子・度・白宗・洋敏・恵美子・信治・頂留子・千梢・酔々・敏・栗・吸江・鬼遊・みずほ・涼一・庸佑・あいき・凡九郎・葉子

席題「遊び」 宮西弥生選

本当の遊びは社費で覚えて来
日本人軍艦マーチでよく遊び
遊びまで教えて三代目に仕え
遊びから子供に知恵が付いてくる
遊びではない賢女の三味線響く夜
借家でも遊びの心失わず
聖人は遊びの極致知っている
妻の記憶に遊ばれている古い傷
遊びでは無し生活に泳ぐ鳥
保育所でよく遊ぶ子に遊ばぬ子
職のない男を犬が遊ばせる
お遊びの時間ですよとつくネオン

若本多久志著

句文集「続・老いの坂」

好評発売中・頒価千円送料共

発行者 若本多久志

本社でお取次ぎいたします

スナックで女のウソと遊んでる
遊び疲れた子供の重さが腕にある
手遊びが天職となり家を継ぎ
よく遊ぶ子猿を親が追いかける
老いらくの恋を遊びでないと
遊びでは無いとホステス涙ぐみ
一生の不覚ラスベガスで遊び
海鳴りの向うで遊ぶ大人達
遊ばねばならぬ病気に取りつかれ
遊びのない顔を鏡に笑われる
指名犯派手に遊ばぬ決意する
ホステスの次はひとり来いという
母の手が好きお手玉におはじきに
遊び上手な男を落す落し穴
野良猫は遊んでいても餌を探し
身障児の遊びを分析する科学
べからずの遊びに甘い畏がある
パチンコの指は遊んだりしない
突き当る壁に遊びを教えられ
籠を出た小鳥の遊びなら許そう

席題「無言」 野村 太茂津 選

千万子 雀踊子 萬的 紫香 一三夫 右近 岳人 規不風 水客 涼一 憲祐 惠美子 惠美子 吸江 萬的 滋雀 鬼遊 水客 弥生

ふり向かぬ父の無言に見送られ
千金の重みが背にある無言
おしやべりがやがて無言に負けている
仲のよい夫婦は朝は無言です
再会の涙が先にたつ無言
飲みに行くメモが無言で廻わりだし
世の流れ無言を金にしておかず
二三日妻の無言がこわくなる
もの言わぬ美德を女持っている
言うだけは言わせる腕を組んでいる
役付いて何んにも言わぬうるさ型
毒舌家の無言不気味な座の空気
無言には無言で返す意地を見せ
シルバースー無言の抗議に見下ろされ
一ト筋の芸は無言で語りかけ
定退の父に無言の広い肩
想いか溢れ無言で花を摘む
手話の子の無言のままで意が通じ
無言の訳知ってる母もしやべらな
ささやかな無言敗者へ打つ拍手
絶頂が見えて無言が破られる
言わずだけ言わせ席を蹴る無言
反論のチャンスを待っている無言
横顔にすがりつきたい無言劇
怒ってるとわかってからはみな無言
女房の無言にあつさり折れてみる
巻き込まれそうに無言の時が過ぎ
人形の笑いの中にある無言

滋雀 翠光 みずほ 与呂志 信治 天笑 信治 惠美子 翠光 文秋 一三夫 与呂志 洋敏 英子 英子 綾女 右近 桐下 潮花 信治 柳伸 洋敏 水客 岳人

過去のこと問えば尼僧は笑うだけ
夢で逢う亡夫の無言に腹が立ち
無言でいる父の背中に救される
無言の中に男を馬鹿にする
だんまりの舞台へさくら散ってくる
海峡を越えて無言の旅つづく
禅僧の無言が楽しくなつて来た
誤解されたままの無言を悔いている

兼題「天使」 塩満 敏選

弘生 静馬 文平 優 枯梢 千代三 酔々 あいき 太茂津 雀踊子 庸佑 凡九郎 没食子

舞下りた天使の苦手にゼロがある
白衣脱ぐ天使はデイスコの渦の中
天使から悪魔にさがった倦怠期
俄雨小さい天使の迎え傘
天使今ガラスの靴をはきたがる
太陽が一ツパイ天使とプランコと
愛という文字を掴んできた天使
キュービット時には外れる的もある
風邪ひいた天使翼を休めとく
満天の星を枕にする天使
天使にも鬼にもなります女です
ピカピカの天使の背なランドセル
酔いどれ天使に公衆便所見つからぬ
ずけずけと白衣の天使に叱られる
遠足にエンゼルマークお供する
天使の矢放つ相手を見失なう
春斗へ白衣の天使立ち上り

エンジェル羽根も汚染に虫ばまれ
天使今日下界に降りて妻となる
綾女

挫折感僕の天使が嫁に行く
イブの夜は天使も踊りの中に居る
信治

天使から笑い袋が届くなり
天の川渡る天使に竿がない
岳人

天使舞う絵がヒンヤリと美術館
我が家には孫と言う名の天使いる
潮花

天使かも知れぬ指輪をさしていない
試歩の朝天使やさしく杖を貸し
英子

春風の二人へ天使橋をかけ
新婚の頃は天使に見えた妻
多久志

天使の矢間違わなかつた僕と君
エンゼルのほほえみ乳の香が匂い
柳宏子

酔うても天使の寝顔覗きに來
エンゼルが来そうな窓を開け放ち
洋敏

病院の天使お尻へ針を刺す
豊かなる乳房で天使よく太り
紫香

兼題「枝」 金井文秋選

花鉄枝の命を剪り惑い
花付けた枝で隣は邪魔がらず
鬼遊

お隣りの枝がお庭を深くする
ふくらんだつばみに枝も目にとまり
敏

枝変えてかえて蝶も春を酔う
盆栽の枝は個性のない美型
文平

夜桜の枝に惜春結ぶ詩
小雅子

枝に肥料かけるにも似た育児法
境界線枝は自由を主張する
右近

肝腎の枝をちよんぎる半可通
枯枝に造花をつけて見たくなり
度

お隣の枝気になり出した痲症やみ
枝張って大樹は影をいとおしむ
柳宏子

一本の枝を辿つた先祖の血
切るところで切つて枝ぶり生かされる
蘭

一枝の梅が匂つてくる茶室
目障りな枝にいちばん陽が当り
吸江

陽あたりをよく知つている枝の向き
潮風に耐えて斜めに松の枝
水客

初咲きの枝を捧げる御仏前
貧すれば隣りの枝に腹が立ち
滋雀

枝先で毛虫しばらく考える
一枝の桜でなごむ駐在所
翠光

アーケードの枝に匂わぬ花ばかり
みの虫がゆれた小枝の遊歩道
英子

一枝をだまつて貰う手が震え
枝道に外れた男へ日が長い
柳伸

春の枝小鳥の重みだけしなる
生命を主張し新芽枝の先
信治

松の枝金色夜叉の月が出る
記念樹の枝太くなり平和な灯
あいき

一本杉の枝が生みだす星の数
小鳥にも夫婦で止まる枝を持ち
柳伸

渡り鳥優しい枝を忘れまい
信治

尺取虫枝の長さはよく知らず
文秋

兼題「籠」 阿萬萬的選

鳥籠の中で人間あくびする
鳥籠へ老いの日課の餌をきざむ
白李

籠盛りの見舞虚栄を見せている
鯛の尾が籠をはみ出す芽出たい日
曲ん手

市場籠気になるうわさ聞いて来る
籠の鳥逃げて野鳥になりれず
静馬

器用貧乏籠のあむのを覚えて来
花籠に春の唄あり少女病む
優

市場籠の中カラフルに子供の日
春しんと糞虫庵の落葉籠
千梢

籠を編む愚痴を編む職人の太い眉
背負い籠にあふれる春の山の幸
小雅子

お見舞の果物籠に義理も盛り
母の忌に籠の戸開けて鳥放す
桐下

眉籠に小さい旅のメモがある
籠の鳥つがい死なれてそのまんま
静歩

ストレスが溜まると籠を編む男
裏切りを悔ゆる深夜のみだれ籠
酔々

白川女籠から春を負うてくる
野仏にわらびの籠が置いてある
白宗

柳鶴も添えて見舞の籠届く
籠をあむ手元を冬の陽がかけり
潮花

信治

籠を編む作業が好きで模範囚

朝市の老婆しつかり籠担う

山菜を籠に彩る過疎も春

伊勢エビの髭が動く土産籠

籠の中の小鳥は幸せかも知れぬ

市場籠提げて陳情組帰る

鳥籠がもうさえずらずにわか雨

ヘルスメーター増減なしの脱衣籠

山の中籠ぶら下けている地藏

籠を編む手から民話こぼれ出す

民芸の籠に揺れてるわらべ唄

お隣へ少うし分ける春の籠

花籠に紛れた蜂が僕に似る

継ぎ手のない民芸の籠編む老夫

兼題「反動」 橋高薫風選

反動をつけて仲間がやってくる

反動の旗を振る手はかくし持つ

反動呼ばわりして労組内輪揉め

反動と反動ぶつつける策を立て

結納を飾る気むすかしい父となる

反動の怖さを知らぬ半可通

父親の無学が受験の子を強いる

砂糖見た蟻反動を中止する

反動よりすこし早く爪が伸び

反動へ朴念仁の手も使う

反動であろうと保守の強さ見せ

英壬子

善紫

滋雀

雀踊子

度

桐下

柳伸

没食子

岳人

太茂津

千代三

恵美子

水客

萬的

恵美子

英子

善紫

庸佑

文平

静馬

弘生

規不風

度

紫香

文秋

反動も持たぬ男が愛される

女にも反動がある共稼ぎ

反動を罵っているエゴイズム

反動の犬は矢鱈に吠えつかぬ

保護色のまま反動の中に座す

反動の分子に細いのが一人

反動が眼の中にある一人っ子

赤旗をふって仕事が決まらず

反動は静かな静かな黙秘権

心地よい反動があり風の糸

艱難の半生令嬢嫁に取り

反動とそしられ守り抜くのれん

反動と目されている握手する

反動のことも計算しといたが

歴史から見れば反動起りそう

むかしむかしの反動を聞く石ぼとけ

反動の一人難壇から落ちる

若かりし日の反動も華である

反動へ駄馬一瞬を嘶きぬ

反動はやがて真赤に爪染める

一寸の虫の反動刺しに来る

反動の日は八ミリを持たず行く

反動ではないが憂国忌を偲ぶ

反動に乗ると人生面白い

反動の眼はじっと天を見る

反動の分子と見下げつつ怖れ

白李

柳伸

多久志

紫香

千万子

千代三

柳伸

洋敏

弥生

菜

英壬子

右近

水客

古方

洋敏

恵美子

涼一

滋雀

桐下

醉々

弥生

紫香

酔々

あいき

小雅子

薫風

薫風

薫風

5月号

☆各地柳壇☆

追加分

川柳ささやま

河原みのる報

同感と相づち打てる妻でいる

同感が亡母の足跡追って生き

同感のほか意見ない老いを生き

同感と一言居士がケリつける

鉢巻が皆同感にしてしまい

世話好きが深入り過ぎて妬み受け

終着駅深い眠りを揺りおこす

省エネのつげは庶民に背負わされ

省エネに耐えられる身も令を寄せ

暖房が低く雑談の花咲かず

省エネへ薪もたけない温水器

落選をして真実の友を知る

奇蹟まだ信じてくれる友がある

友釣りの哀しい糸が付いているの

ヤアヨウと売と銀髪掌を握る

勝山双葉川柳会

新聞を読んでふりしてみんな聞き

忍び寄る老いを夫婦で温め合い

古里がなつかしくなる雪使り

五人目はおんな待望の雛飾る

人間の弱味にジンスクス強く生き

六十路まだコーヒー拒むことはない

ジンスクスを破ると坂はゆるくなる

ペン持てば日記は海の広さ持つ

五月

テル

宗珠

近郊

与志

靖子

百合子

ひか平

素水

ゆきお

久住

可住

越山

みのる

ゆう也

智恵子

キミエ

千世子

静子

千里

節子

智子

君子



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

京都塔の会

松川 杜的報

箸紙へ孫の名も書く幸思う
したしたのこつを覚えて落し蓋
目覚むれば水仙の香が闇にあり
雪椿春を待たずに咲き揃い
お元旦ふたりっきりの祝膳
山茶花の赤が暖冬を持て余し
青が出てから歩き出すのが気にいらず
初午のいわれが違う県さかい
初午でお猿の絵馬も借りられる
お年玉貯めて母から買われる
貯めるのはあきらめ明日の米をとぐ
遺産分け採めさす程に貯めていず
家が建ち二人で童話が消えた丘
史跡の丘団地がそこまで攻めて来る

吉永川柳会

横山 一声報

本当の強さは低い姿勢とる
日記帳だけが本音を知っている
金のある強味言いたい事を言
いい訳の顔に本音が書いてある
独り言の中に本音を覗かせる
酔う程にすらすら本音吐いてくれ
ユーモアな祝辞が席を和ごませる
借金を返した途端強くなり

- 芳子 紫香 美穂 潮花 花代子 求芽 水客 和友 杜的 佳丹子 白溪子 明代 飛鳥 高的 留夫 秋月 良声 胡風 正米雄 久米雄 柳子

雑草の強き焼かれても踏まれても
女房が強うて男小せう見え
川柳塔まつえ 恒松 叮紅報 浄美 芳月

一と枝にかけたる庭師の意地をみる
反動と主流に揺れる民主主義
枝先に大吉重く結ばれる
掘りすぎた反動原油底をつき
裏切りの日から太陽が拝めない
僕らの心を裏切った万年筆
不孝しだその反動が子に巡り
裏切ったソ連を憎む忠魂碑

中流の地位へ定年期がせまる
水中花裏切り者の影もゆれ
中流は親と対話のないベツト
どんぐり川柳会 谷垣 史好報 叮紅 舞美 舞吉

野仏もたまには首も曲げたかろ
猫の首につける鳴らない鈴を撰る
スクラムに鈍な初老が一人居る
首のない男が持っている履歴
千年も添うとは見えぬ鶴の首
スクラムのイデオロギーはたか知れ
スクラムをとげばごろ寝となるパパで
スクラムの端から崩れて行く平和
野良犬の自由首輪はしがらみ

スクラムを解くと歩になる労働歌
首輪だけ褒めて毛並に触れはらず
俵せがまだ見つからぬギリンの首
三号でつぶれた罪のなすり合い
困つた頃もあつたに今の幸
宮仕え首が大声出させない
妻の首切りたい時もある男
スクラムを組むからデモの顔になる
なすり合い敵は見えないとこにいる

史好報 岳人 吐来 吸江 叮紅 舞美 舞吉 鉄花人 鶴丸 孤呂二 寿美子 三和 醉夢 愚童 浄美 芳月

いずも川柳会

板垣 草丘報 孝太郎 英佐子 草丘 智恵子 栄

一城の主になつて庭掃除
反戦旗孤独な城に立て籠る
タコムボの城主あわてた舟の上
クレコリン城壁自由受けつけぬ
円満は一つ財布の嫁姑
円満な家庭が好きな福の神
天神の梅で期待の荷が重い
添え書きに親の慈愛が書き足され
無条件炎えたと愛にも冷えた雨
失恋のなみだバカバカと書く
ガラス越し瘦れの小枝がノックする
一城の主が復讐は脛を掻く

新築の城に福豆はじく音
今日からは主婦と名のつく城を持つ
住み馴れた我が家を城に子等が寄り
条件もつけずに貸して夜逃げされ
睨めっこローンとお城の鬼瓦
結納の目録書く手ふるえてる
最高の梅見炬燵の飲み仲間

川柳たけはら 森井 善居報 居てはしい嫁つてもほしい娘を思い
一年の計三猿を学ばねば
幸福を拾う一円玉拾う
一円の眼をさします募金箱
児の寝顔ふつと編み棒やすませる
弱点を知つてる女の涙かも
歯しさをせじくり見せて海豊か
歯に衣着せながら子が生立たとす
泣きながら泣きながら子が生立たとす
悔恨の音のひとつに棺の釘
原点に白い手帳が埋めてある
棟領の曲尺さびを寄せつけず
夕風ぎの海を流れてゆくワルツ
すつからかんになつたら渡る丸木橋

善居報 静水 房子 鬼焼 文晴 鈍舟 寛子 靖子 敬幸 不朽 西合 一節夫 青居

秀一子 可保留 独秋 虎仙 正江 緑之助 耕草 九二老 鐘堂 多賀子 舞美子 軒大楼 醉夢 芳美子 草丘 智恵子 栄

夢からさめてまだのこつているこわき
争いの窓にきれいなお月さま
酒徒無名無職無名のなれの果て
再職の決断阻む過去の椅子
仕合せは元氣な孫をもてあまし
火の車と見えぬ真珠のネックレス
日本画のようにも見える山の里

和歌山七面句会

良き出逢予定を変えたその日から
バーゲンに毛皮着る間もなく春
温泉につかる予定が通夜の席
甘すぎた予定天中殺に入り
病人の自慢話に逆らわず
足音で好きな看護婦聞き分ける
バーゲンにおなごはんの手すさまじく
病人が見ていた心の奥の嘘
バーゲンと言つてもあなた知らん顔
病人が口だけ達者医者も数
バーゲンしか知らぬ女房と十余年
遠来の友に予定を変え更す
病人の意地です枯野など踏まぬ
病人と言つて無し医者通い
予定では五〇〇万は貯つて
衝動買いは夜は叱られる特価品
病人の不安へ医師の笑顔あり

太田川柳会

藤田軒太楼報

親の脛かじり尽して新入社
掃き捨てる落葉の彩にある余情
自動車の悲鳴命を捨てる音
応接間愚痴灰皿へ捨てて待つ
捨てられた未練夢泡に酔い
欲捨てての筈の余白を黒く塗り
つくろうた塗絵は所詮捨てられる
捨てて来た夢が棲みつく過去の殻

小四紀 笑子 かつ子 秀夫 かつ子 英詩 中一愛 三幸報 隆恵 フクヨ 智水庵 五月 周徳 昌三郎 品雄 秀子 淳子 啓子 光治 二咲子 見 寿子 勇次 文厚 三幸 幸一 九二老 夢酔 可保留 独仙 多賀子 美浪 三三男

欲捨てて心を洗う雨が降る
お気に入り勤の鋭い女秘書
勤くって聴けば善意の見つからず
父は勤子はコンピュターで噛み合わず立雲
網下ろす海の男の勤に賭け
勤だけの勝負一年の決算書
若妻のそろそろ目立つパンタロン
人柄を褒めて器量は別々おおく
剣悪な座を人柄が来て丸め
うち解けて話に実のあるお人柄
うみなり川柳会 岸本 無人報
舗装道青写真では延びている
延長の議会で消えぬ深夜の灯
湯の宿で妻と河鹿の声をきく
貰い風呂思わずクシャミうろたえる
老妻に湯かげんきいて丸く生き
煮えたるるやんまん湯気が吹き上げる
外泊が指輪に化けていき
牛の皮儲かた方へ化けていき
素顔でもいいのに化けた夜の顔
血圧が上がる若さもあます
血圧に名を借り休む二日酷い
惜しまれて散って桜に悔いがない
そむかれた背へ冷たい桜散る
離農の家に喝采のない桜咲く
金策の足が夜核通り抜け

雷音坊 みのり 虎秋 耕草 緑之助 秀子 孝太郎 頑惱児 軒太楼 無人報 盛桜 天吟 笑王 正 華子 静夫 千勢 舟宏 富美湖 無人 熊生 芳 由多香 雄人 洋汀 鬼遊報 鎮彦 茂雄 雀踊子 昭子 万里

両耳をいっばい開いてノック待つ
横丁を歩く血が飛んでくる
森の精すまか焼かして星になる
男客とびらはすこし開けておく
もう二度と動く時間のない遺蹟
結んで開いて親を泣かせる子にみえず
森を出て急に他人の貌をする
どんぐりが並ぶと一つが背伸びする
森抜けて見上げた山がまぶし過ぎ
阿弥陀堂開くと菩薩笑み給い
横丁で趣味の盆栽羨やまれ
額田女王の涙にじんでいる遺蹟
ポケットに封書があつて森へゆく
電卓でたたく利益のおそろしさ
ふと野性そんな心を持たず森
岸和田川柳会 植山 武動報
還歴へせめて蒲団の赤を選ぶ
枝ぶりの良きたしかめて花鉄
土壇場で女は意地を試される
食べ物のおいしい分だけ太り
ひとり身の影をゆたかに耐えてる
父として男としても耐える朝
よくこつとも耐えたものだとおかしがり
耐える事に馴らされ母は小さく古い
信用するすれれば何んでも効く薬
切傷へ成程効いた医者いらず
妻の分を衣服貰うた風邪グスリ
雪どけの新芽を誘う春の風
誘惑に勝つて寂しい帰路独り
盗まれる太陽ビルの谷で耐え

弥生 みずは 柳選 鬼遊 頂留子 小松園 糸葉 幸生 綾女 鶴声 秋美 夕花 凡九郎 武動報 さよ子 こう ひで 富士津 波津 春久志 辰雄 民治郎 加仙 武助 みずは 白光子 操子 三男報 武雄 英子 正博

川柳わかやま 堀端

心配をさせぬ言葉に嘘ひとつ
嘘一つも余している善人
様々なカメラ見飽きた富士の山

につこりと勝気な寡婦の持つ涙
底抜けに明るい遺書をかく善人
善人のかけらを覚ます神の鈴
足踏んで詫げがにつこり返される
月給袋妻につこりこしまいこみ
どう撮つてみたとして私でしかない
旅ひとり春を探しにゆくカメラ
不器用な嘘をにつこり聞く痛み
につこりの企みを欲しいもの
善人の仮面は土壇場で脱げる
恐しい顔につこりと選挙ヒラ
カメラ前今年の顔が一つふえ
一瞬をやかな抵抗善人白紙出す
ささやかな抵抗善人白紙出す
につこりと笑つて済ませて女です
善人は善人などと思つてず
につこりと必死に耐えている泪

オーエスケー川柳会

大阪形水報

大阪で耐えて東京で成功し
寒がりへ攻撃かける隙間風
人前で背中のかゆさじつと耐え
仕送りで減つてバイトで耐えてます
見送つてホームが急に寒くなり
トンネルを抜けたらすぐにマイホーム
耐えて来た分だけ女長く生き
久々に正座耐えて足の裏
節穴があるからのぞいてみたくなり
大声を吸い込んでいくからつ風
黙秘権調べる方も耐えている
寒がりが河童は丘で春を待ち
寒がりが何のかんのはしこ酒
大声で唄うと軍歌調になる
人間のエゴに耐えてる鉢の松
寒がりを地蔵が笑つ冬空
大声の方へ片寄りかけている

雀踊子 雀子
メ女子 登紀夫
弘生 好郎
幸 太茂津
きみ 紀久子
十郎 紀美女
武太 三男
凡九郎 和子
千寿子 和子

椿落ちる話はない耐えている
大声で田舎の友がやつてる
寒がりにさかろうように妻薄着
大声が走る水道止まります

川柳化粧粧

植村客遊子報

呆けているように見えても損はせず
足がしびれたのに説教がまだ済まず
かあさんの小言が耳朶に甦る
杖ついて世間を更に狭く住み
琴の音も聞えて城の街歩く
生きている砂丘の詩を聞く旅路
まだ妥協しないが妻の薄化粧
たばこ盆吸わない家は気が付かず
一浪の母賽銭を弾んは気が
閑な奴ボタンの取れた服で居る
似顔絵に傘とホテル書いてあり

城北川柳会

川口

あんなだけ特別と云う名台詞
薬にでも縋る特別祈禱料
特別な顔して臨む見合席
特別でやつと覚えてみか席
送別宴今日は主客で床柱
特別バーゲン母は戦の顔になる
親善の 歎歎 特別便で
招待の特別席は高軒
特別の席でストレス溜りそう
気分転換特別仕立の服を着る
帰る子へ母は特別気を遣い
仏壇も特別セルベク岸前
逃げられた魚特別太く見え
特別の席にお尻が落ち着かず
誕生日 特別食の豪華版
特別番組テレビは母を離さない
新顔が高いおかねでプロに入り

弥生 好郎
形水 入仙
紅月 秋月
岳香 葉香
奮男 越山
実男 永楽
大鷹 秀峰
秀峰 秀峰
客遊子 弘生報
鬼遊 道子
喜代郎 喜代郎
テルミ 喜代郎
右近 満津子
美恵 満津子
ふみ 満津子
左春 満津子
なりこ 満津子
星斗 満津子
ハル工 満津子

隠し芸うまく新顔おはえられ
新顔の入社は今日から将棋の歩
南大阪川柳会 中川 滋雀報
柳伸 三四
君子 三
志省 三
憲祐 三
小雅子 三
雀踊子 三
綾女 三
小松園 三
小松園 三

前向きに走れば強い風当り
前向きの足音だから信じ切り
前向きの背に運命がついてゆく
コーナーを曲ると余生が見えてくる
第二コーナー明日のパン買う店がない
コーナーの死角で掏摸の目が光る
隅にいない青白い子が良く出来る
名乗れない母が主役で居た戸籍
人気出た主役が背負うスケジュー
主役も母の背中で眠てしまいい
犯罪の裏の主役は美人なり
インフレの車輪をそつとデマが押し
風呂屋から小さなデマを聞いて来る
デマ作る人は天才かも知れぬ
デマで良し浮名流してみたくなり
コビーから虹の一角抜けている
膳本の汚れたまんまコビーされ

佳句地10選 (前月号から)

辻 圭水選

ただ堪えて能面となる化粧する
本腰になると女は距離を開け
真打になつても米朝容赦せず
やすらぎに遠く都会の空気吸う
マネキンの器量とちがう人に売れ
方便の嘘にも小人口ごもり
快調な便通 男盛りなり
何もかも云うてしまつた気の軽さ
本腰になつた女に見つめられる
血の通う対話へひとみ生きてくる

正子 正子
小松園 小松園
好郎 好郎
恒明 恒明
かつ子 かつ子
頂留子 頂留子
薫風 薫風
柳伸 柳伸
寿子 寿子

両替機コピー如きに騙される
母のコーヒーがのみたい少年兵
左利き今日はコーヒーで追い返す

川柳大坂 西岡 洛酔報

真佐志

年賀状百枚ほどのお付合い
煩惱を背負ったままで年が明け
胸張れば丸い背中に痛み知る

大上段構えて手足が震え出し
三猿でゆけば人生味気なし
叱らない親父で子供横に伸び

大声で話す男女は善人
寒さは勝てず鉢植力尽き
床の間のダル馬が見ていた袖の下

今年こそやる気自分のラッパ吹く
帯ぐうっと下けて吾が家と云うゆとり
カラオケで自信のあるのが世話をやき

悪人が引いてもみくじ吉と出る
おみくじは私一人の秘密です
神主の商魂大吉ふやしとく

吉と出たおみくじ石にけつまずき
成人式仕立おろしの晴れ姿
けちゃんばも新品おろすすい日和

琴の音が日本列島初春にすい

川柳後楽 (岡山市) 井上柳五郎報

裸婦像に見とれる夫の袖を引き
裸婦像に貸してやりたい布があり
裸婦像を四方八方眺め入り

裸婦像に春の光が眩しすぎ
定年も息つく間なし次の職
定年延長まだポロ切れをしぼりとる

定年延長まだポロ切れをしぼりとる
花道のない定年の幕がおり
定年へこれが最後の判を押し

無駄足が奇蹟となった儲け口
無駄のない話は胸に沁り誘り

文 秋 鬼彦 鎮遊

走っても無駄うらめしく追う尾灯
無駄話して本心の探り合い
無駄のない暮し時計の遅れない

涙など見せぬが寡婦の因となる
義理に泣く涙は出てもすぐ乾き
喜びも悲しみも母涙なり

涙には弱い男でも涙される

三井ヶ丘川柳会 高田 博泉報

野仏へさせてやりたい頬かむり
迷つての米ソに向けの顔の位置
ヒヨットコの面にヒヨットコの心湧く

ふり出しに戻すつもりは横車
振り出しに戻つてしまふ大エラー
ギヤング役照れた素顔でインタビュ

才を出す機会を狙っている笑顔
掃省客笑うえくばに放郷がある
笑う日を信じて涙飲みくだし

ふり出しに戻る気持が五度六度
初夢の未来の顔を信じたい
整形の顔と気付いた子の誕生

よその顔で煮める箸をとる
バックジャンにときましようかそのまんま
前月分

倅せと思ふ日素顔も美しい
顔洗う度あ今日も生きている
美容院これが私の顔で出る

星空に小さな意地を笑われる
顔を地に伏せてシルクロードは無事暮れる
三日目も戎が笑う残り福

もう一ツ目の顔はワルツを踊る眉
スッテンテンの男にふり出しに甘くない
猥談を真面目な顔で聞いている

二ツ目の顔も洗っている男
ふり出しへ白紙一枚ずつ切る

秋 月 梁太 久米雄

再会の女笑いが消えていた
渋滞の車を自転車から笑う
笑いたの時も仁王はじつと耐え

微笑みを忘れてからの冬
道 振り出しへ戻つて王手考える
振り出しに戻る小さな愛を得て

柳つなぎ句会 津守 柳軒報

自己批判いっそスパイをおやりやす
娘の恋を見抜く親い母の感
正味の話と腹を割って来る

我慢する事に庶民があき始め
我慢している訳は切札持っている
解決がつかず紫煙でむせかえり

解決に蒸発という手を使い
解決が見越し乾盃準備する
殉職が出て解決へ歩み寄り

解決のたばこの一本目が旨い
解決までのいくさを女抱いている
春雨へ解決を待つ野菜高

自殺者を出して解決はやめられ
猫に鈴つけて解決できました
解決に目鼻がついた煙草の輪

解決の糸口となる毛一本
解決へ三年越しの春が来る
解決にたばこたびれてる赤い旗

双方に傷がつかないよう納め
科学者も日めくりを贈る大安日
アイデアに商社の競うカレンダー

賽銭箱あけて神主深い顔
神主の娘で塗り矢を夢に抱く
二代目の舞台照明七光り

乳はなれせぬ二代目を齒痒がり
よろこびの孫の笑顔に嘘はない

東大阪川柳同好会 斎藤三十四報

静歩 鬼彦 柳宏子 英比古 小松園 蕭風 美代

凡九郎 綾女 善紫 柳選 美代

千代三 美乙女 柳宏子 桐下

規不風 雀踊子 雅風 醉々

恒明 茂園 育路 小松園

慶三 善紫 弘生 良風

湖風 勝美

八木摩天郎追悼句会

日時 五月七日(水) 午後六時
会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話 271・3935番

兼題 柳 堺(市) 話
「ふるさと」
「長身」
「役所」
席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
費 三百円
★投句だけの方は切手百円封入

川柳村好郎
阿部柳太郎
板尾岳人選
河内天笑選
中島生々庵選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

おことわり・前号予告の
兼題は8月に回わしました

常任理事会

5月1日(木) 5時から
6月2日(月) 5時から

募集

七月号発表 (5月15日締切)
川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢 小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「物価高」 野呂 右近 選
「御奥みこし」 小林 孤呂二 選
「竹」 木山 遠二 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご利用ください。

八月号発表

(6月15日締切)
川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢 小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「ホームラン」 里 小路 選
「夏」 和田 維久子 選
「前列」 久家 代仕男 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

5月の常任理事会は1日5時から

予告
路郎忌と橘高薫風氏の
東洋樹賞受賞記念句会

昭和55年7月7日六時
会場 金属会館
柳話 中島生々庵
「ひと時」 河内天笑選
「鶴」 黒川紫香選
「駅」 岸本吟一選
「橋高薫風選」

定価 四百円(送料29円)

半年分 二千五百円(送料共)
一年分 四千八百円(送料共)
昭和五十五年四月二十五日印刷
昭和五十五年五月一日発行

大阪府南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼 中島蓬太郎
発行人 藤原童心社
印刷所 藤原童心社
〒542 大阪府南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社
電話 大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三三六八番
普通預金口座番号・一〇二七八三

・ペンペン草・

ファン

★ファンというものはありがたいもので、たとえば本誌目次横の原稿を鳥取の皆さんにお願いすると、ほとんどが故森田若人氏の遺作である。生前の氏のお人柄がしのばれるというものである。

★毎月の雑誌「らん」のページを繰るとき、まず自句をさがし、そして好きな作家、またはライバルの句へ眼を

移していく。こうしたファンをもつ人は幸福である。

★若い頃、映画雑誌の編集をしていたが、当時の人気俳優百々ちやんこと市川百々之助を囲む座談会を道頓堀のある食堂の三階で催したことがある。会場は定員制だったので混乱はなかったが、会が終って外へ出ようとしたら会場の前は交通整理の警官が数人出動とい

うハブニングがあった。当時の道頓堀は不夜城で午前〇時を過ぎてても人通りは絶えなかった。ぼくも世話役の一人だったので、百々之助を抱えるようにして裏から脱出したものがあり、ファンのだとつくづく思ったことである。一晩年人気が落ちたからは道頓堀や千日前を歩いていても、だれ一人ふり向かなくなった。

▲菓子コーナー

▼「百花斉放」とゴールデンウィークの五月、この月ほど私の心を慰めてくれる月はありません。

▼今年から毎週日曜に持病の治療に通っている。病院の門を出ますと、空はあくまでさわやかに晴れ、あたりは鮮やかな緑が映え美しい花々が咲いています。

▼身近な花にも見あきぬ魅力があるように、持病とは同居しております。私には病気が体の一部のような気になり、不思議と落ち着いている自分を見出すこの頃です。

★今のは歌手の時代だが、押し寄せたファンが押し倒されて死んだりしている。ファン心理というものがわかるような気がする。

相撲ファン

★ぼくの父は、相撲と女で家をつぶしてしまったが、二百円でミルクホール（喫茶店）を出せたところ、横綱に化粧まわしを贈ると数千円かかったそうである。太刀持ちと露払いにも同じ化粧まわしが必要とし、刀だつて要る、祝儀ははずむとなれば相当な金額になるだろう。

★大阪場所（三月）になる、かならず白房下審判委員の右横（審判委員のからだ一つ置いた後ろ）へ、五十歳ぐらゐの女性が十五日

闘観戦している。

★この女性ファンを見出ししたのは本多柳志氏だが、二年前、新宮の大矢十郎氏の招待で三月場所を観せられたとき、柳志さんからこの話を聞き、注意してみると、いつもテレビの右端にこの女性が陣取っている。きも色の色は白が好きか、ほとんど白の和装である。ときには淡茶色の目もあるが、昨年は今年も中人り時分になると判を押しのように審判委員の右横に坐っている。

★両手をきちんと膝の上へ置いて身動きもしない。力士が塩に來ると、ひよいと力士の顔を見上げるくらいで、東西の力士のどちらが勝つても拍手一つしない。これというお目当ての力士もないようにである。根っからの相撲ファンなのだろうか。一大阪のどこかの女将といったタイプの人である。

★この女性を三年間見てきたわけだが、毎年同じ席をとっているところをみると、相撲関係の人か、木戸ご免のファンか、どちらかであろう。一正時代に女性で木戸ご免の人が巡業にも従

いて行った、と少年のころ「武俠世界」という雑誌で読んだ記憶がある。

行司にもファン

★術・若時代の昭和34年ころの名行司木村庄之助は、大阪大相撲時代は木村正直の行司名で若手ナンパワウの人気物だった。その美声と美男ぶりに南地ありの芸妓連が、マ・サ・ナ・オと力士の名を呼ばずに行司の名を黄色い声を張りにあげながら立ち上がって熱狂ぶりだった。こんな相撲風景は始めてである。少年のころの思い出だが、このようなファンは前代未聞といってもいいだろう。東京と大阪が合併してから、ぼくは正直ファンだ。た。庄之助（何代目か資料がない）を襲名して、キビキビした軍配さばきは天下一品だった。

★女性の相撲ファンがふえ

た。その理由の一つに、男性の筋肉美を挙げる人がいる。ストリップパーを見る男性の眼と同一視することはどうかと思うが、それを裏づけるように、力士の緋の下は何も着けていないとい

（不二田一三夫）

肉体疲労時のVB₁補給に
アリナミンA

アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠・授乳期のビタミンB₁補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚氣。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆よくわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。

武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

- | | | | |
|----------------------------------|---------------------|-----------------------------|---------|
| 白浜温泉——忘れえぬ
政府登録国際観光ホテル | はまゆうの宿
ホテルパシフィック | 徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 | 鳴門 |
| 政府登録国際観光旅館 | 朝日 | 政府登録国際観光旅館 | 鳴門公園ホテル |
| 勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 | 中の島 | 紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 | 紀の川苑 |
| 湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 | 湯の峯荘 | 大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに
観光旅館 | 淡の輪苑 |
| 和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 | 萬波 | 大阪・なんば——清楚で近代的なホテル | ホテル南海 |

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
 サービスチェーン大阪案内所
 ☎06-631-0222



南海電鉄

つめたさに、おいしさをそえて……………

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイ



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店
 近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪各店)
 京阪モール なんば新川店 虹のまち鹿鳴
 中之島サン・ストア 淀屋橋サン・ストア
 南海難波駅構内店



大阪・なんば



TEL (641) 0551